夏の粉雪の舞

氷翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏の粉雪の舞

【Ｎコード】
Ｎ０３９２Ｐ

【作者名】
氷翠

【あらすじ】
藍染との戦いは、死神側が辛くも勝利を収めた。
その半年後。現世は、真夏に雪が降るほどの寒さに見舞われる。その原因は……？
以前に投稿した『粉雪前夜』の本編となるお話。
日番谷を相手に、一護と乱菊さんが奔走するお話を予定しています。
残酷な描写がありますので、お読みの際はお気を付けて。
●注意点●数字の入っていないお話は番外編のような物です。別に読まなくても、お話に支障をきたすワケではありません。●キーワ

ードにひとつ追加→「諸々な捏造」。いろんな捏造が入らないと辻褄が合わないことに気付きまして…（'１１．０７．１７）●歌詞転載についてのお知らせが届きましたので、文中に書いた歌詞を消しました。（'１１．０７．２９）●キーワードにひとつ追加しました→「オリキャラ」。登場はかなり先です。（'１１．０９．０１）。※題名変更。元『粉雪の日』です

夏の夜の夢　兆しの夢…？（前書き）

『もうひとつのプロローグ』話として、お楽しみください。

夏の夜の夢　兆しの夢…？

遠くに、子どもが立っている。
ただじっと、俺のことを睨んでいる。
まるで、恨むかのように。
憎むかのように。

少しずつ近付いてくる。
俺も子どもも歩いてる様子はない。
それでも少しずつ、近付いてくる。
おかげで子どもの姿格好が、少しずつわかるようになってきた。

見た目は5、6歳。
袖がなく丈の短い、薄緑色をした着物の1枚だけを、身に纏(まと)っている。
その着物から出ている腕や足は白い。
体付きは、それほど栄養状態が良いとは言えなかったが、かといって貧弱なわけでもなかった。
しかしそこまでわかっても、口元以外の顔は見えない。

「……」

子どもが何か言っている。
聴き取れない。
別に小さい声であるわけではないし、そんなに遠くにいるわけでもない。
別の音が邪魔をしている。
強い風のような、吹雪のような。
そんな音が、子どもの声をかき消している。

その大きな音の中で、子どもは繰り返し、同じ言葉を口にしているようだった。

止まれよ、音。
俺は子どもの声が聞きたいんだ。
助けを求める言葉だったらどうする。
風の音だか吹雪いている音だか知らないが、その大きな音を止めてくれ。

俺はどうしても聴き取れないまま、意識が薄らいでいく。
瞬間、あの大きな音が消え、子どもがなにを言っているのかやっと聞こえた。

その言葉を聞いて、ゾッとした。

「みんな、死んじゃえ。」

ひとを、呪う言葉だった。

視界が白一色に染まるその前に、俺はそいつの名前を叫んだ。

※※※※※※※※※※※※※

一護は目が覚めると同時にバッと跳ね起きた。
寝間着のジャージは汗でぐっしょりと濡れていて、ピッタリと体にくっつき、まとわりついている。
暦上の季節は『もうそろそろ真夏』と言う頃だが、今年はいわゆる冷夏なのだろうか。
大抵ジメジメとしているはずが、まるで秋のような涼しさだ。
冷えることがあったとしても、これ程までの大量な汗をかくだなんて、尋常ではない。

一護は「はあぁぁ……。」と大きな息をつき、窓から外を見ようとカーテンを開けた。
真っ暗、と言うわけではないが、朝日が昇るのはまだまだ先のようだ。

そして……

「……さっみ・・・。」

そう、かなり寒い。
いつもなら即二度寝を決め込む寒さなのだが、今視た夢がどうしても頭から離れずにいて、気になって気になって、どうしても眠れなさそうだ。
掛け布団を肩からかけるようにしながら、ベッドの上で胡座をかく。
頭から離れないはずなのに、どんなに考えても、内容はサッパリ思い出せない。
それでも、嫌な夢……否、『嫌な予感のする夢』だった気がする。

藍染との戦いに勝って、不安など無くなったはずなのに。

「……変なことに、ならなきゃ良いけどな・・。」

言葉と共に吐き出された息が僅かに白く染まり、一度だけ、自信なさげにふわりと揺れて、消えた。

夏の夜の夢　兆しの夢…？（後書き）

こんな場面がネタとしてちょこちょこと書かれていました。

ただ、本編に入れたいけどどこに入れても変になりそうだったので、こんな格好でお披露目となりました。

何となくですね、『一護が夢を視る』的なお話を入れたかったんです。

……予知夢じゃなくて、予感です。

つまり勘です。

ヘンなところ、誤字脱字はもちろん、何か感想があればお書きください。

では、これで。ここまで読んでいただきありがとうございました。

よろしければどうぞ、この先のお話もお読みになってください。

1・異常な8月（前書き）

以前投稿しました『粉雪前夜』の本編です。彼方にも書きましたが、本編には残酷な描写があります。そのうえ流血もありますので、お気を付けください。
実は、あるアーティストのある曲を基に書きましたが、そちらとは全く関係はありません。

一話一話が短いうえに更新が遅いと思いますが、なにぶん作者が専門学生なもので、その点はご了承くださいませ。

では、どうぞ。

1・異常な8月

藍染との大戦が、こちら側の勝利という形で終わっておよそ半年。
今は夏真っ盛りの八月。
これ以上ないほどに、暑い。

いや、暑かった。

今は、寒い。
これ以上ないほどに、寒い。
秋を飛び越え、いきなり冬が来たようなほどだった。

どうやらこの異常気象は世界中に起こっているらしい。
なぜこんなにも寒いんだ？
「・・・・変な感じ、だな・・。」
死神代行・黒崎一護はひとり、白い息を吐きながら呟いた。

道路や家の屋根、塀の上や公園の遊具に、真っ白な雪が堆く積もっている。
5？なんてそんな、ちゃっちいものではない。
なんと、一護の膝あたりまで埋まってしまう。
お陰で靴の中にまで雪が入ってきて、足先が冷たくなるありさまだ。

公園では、子ども達が「冷たい冷たい」と言いながら、雪だるまを作って遊んでいる。
ついこの間までは、蝉を追いかけ捕まえようとしていたはずなのに。

そんなことさえコロッと忘れているような笑顔で、雪を押し固めていた。
こんなところを見ていると、子どもはやんちゃで良いなぁ、と思う。
一護はそう思いながら、顔をマフラーの中にうずめて浦原商店へと向かった。

1・異常な8月（後書き）

如何でしたでしょうか？
短いと思いますが、ここがちょうど良い切れ目なもので……。
これから連載、がんばります。

次回、浦原さん宅にて現世組集合。

2・浦原商店にて（前書き）

どうも今晩和～。
本日は休みだったため、がんばってみました。
前回の次回予告通りに、なった、はず…。

ヘンな場所・言い回し、誤字脱字がありましたら、こっそりとお教えください。
怒ったり致しませんので。（むしろ、感謝します！！）
言っておきますと、残酷シーンはまだ先です。

では、どうぞ。

2・浦原商店にて

空座町のある一角に、店主曰く『しがない駄菓子屋』がぽつんと建っている。
その店の名は、『浦原商店』。
戸は流石に閉まってはいるが、その戸には『営業中』と書かれている紙が貼られている。

その戸を見て俺はふと、あることに気付いた。
戸の前6畳ほどが、きれいに雪掻きされていたのだ。
やはり、雨(ウルル)とジン太がやっているのだろうか。
こんな大量の雪を子ども2人に雪掻きさせるのは、いくら何でも酷ではないだろうか。

「こんちわ～、浦原さ～ん。」
持ち手の窪みに手をかけ、がらり、と引き戸を開けながら俺は浦原商店の中へはいる。
入ってすぐの場所は、売り物が並ぶスペース。
いつもは、たくさんの子ども達がお菓子を物色していてそれなりに賑わっているのだが、今日はちらほらとしか見えなかった。

「こんにちはっ！」
菓子を物色していた子どもが、俺に気付いたのか挨拶してきた。
目をやると、見た感じは小学校中学年ぐらい。冬獅郎と同じぐらいの背丈の子どもだった。
「おう。珍しいな、こんな寒い日にも買いに来てるのか？」
「うん！だってこの店、オレが来ないと潰れそうなんだもん！！」
「……へぇ……。」
子どもとは正直なものだ。思ったことをそのまま口にする。

別にそれが悪いわけではないのだが、いつもその言動に驚かされていまう。

「もう。失礼なぼうやデスねぇ……。」

「ぼうやって言うなよっ！」

気の抜けるような声を出しながら奥から出てきたのは、ここの店主である浦原さんだった。

深緑の羽織、縞模様の帽子を目深に被り、手には今の天候には合わない扇子を持っている。

子どもは『ぼうや』と呼ばれたくないらしい。

眉をひそめ、浦原さんをキッと睨んでそう言った。

浦原さんは扇子を開いて口を隠し、からかうようにして子どもに言った。

「あんまり言うと、来てもお菓子売ってあげませんよ？」

「潰れても知らないよ？」

「……それは困りますねぇ…。」

「言い負けてんじゃんかよ。」

逆襲を受けた浦原さんに俺はそうツッコむ。

子どもはニヤリと笑っている。

それほど浦原さんに『ぎゃふん』と言わせたかったようだ。

浦原さんがむむむ、と唸っている時、更に奥から人が出てきた。

「ボク。お菓子、決まったかな～？」

明るい茶髪をなびかせ、にこやかな顔をして子どもに問いかけるその人は…。

「……井上？お前も来てたのか！」

「あ、く、黒崎君！！え？えぇ？！」
俺に気付いた井上は、いきなり顔を赤くして驚いたかと思えば、すぐに慌て始める。
良くもまぁ、あれほど速く表情が変えられるものだ。見ていて飽きない。
「落ち着いて、井上さん。」
「あ…石田君。」
「げ」
俺のすぐ後ろから声がしたと思ったら、今度は石田だった。
石田は俺のことをひと睨みしてから「どいてくれ」と言って俺を押しのけて、浦原商店に入っていく。
涼しい顔しやがって！！
……外はかなり寒いってぇのに。

「まったく。ひとの顔を見て『それ』はないだろう。」
振り返りざま指で眼鏡を押し上げながら、石田は冷たく言う。
それに俺は『誰だっていきなり後ろから言われりゃ驚くっての！！』と心の中で毒付いていると、井上が声をかけてきた。
「あ、あのね！茶渡君も来てるんだよ！！」
「え、チャドも？」
俺がそう言うが速いか、井上が奥の方へ声をかける。

「茶渡くーーん！黒崎君、来たよーーー！！」

井上のその声が聞こえたのか、ひょっこりと奥の間から顔を突き出した影が見えた。
目に前髪がかかった、褐色色の肌をした大男の顔。どう見ても、チャドだ。
俺はそこに向かって、「よ」と言いながら片手を上げる。

その時。

「さぁて～。」

浦原さんの気の抜けた声がしたので、そっちに向く。

傍には、腕にお菓子を抱えてにこにこしている子どもがいた。いつの間にか、言いくるめていたらしい。

浦原さんは大声で、ある人を呼ぶ。

「テッサイ～。この子のお会計をお願いしますね～。」

「はい。さ、こちらに。」

聞こえると同時にテッサイさんが現れ、子どもをレジの方へ連れて行く。

子どもが素直に従っている様子を見ていた俺たちの背を、浦原さんは奥へ向けて押した。

「大事な話がありますんで、どうぞ上がってください。

ここで話すには寒いですし…」

関係のないお客さんが、いますしね

浦原さんのその、小さくて真剣な声に俺は、なにか嫌な予感がした。

2・浦原商店にて（後書き）

如何だったでしょうか。
浦原さんとかテッサイさんとかの言葉遣いが、ちょっとあやふやです。

白状します。
チャド、無理矢理入れました（…）。

次回、この異常な寒さについて、浦原さんが考えを述べる！！…かも。

3・店主の見解（前書き）

どうも。氷翠です。

夜遅いのにがんばっちゃいました。

寝ぼけ眼で書いたので、へんな所、誤字脱字がありましたらお教えください。

では、どうぞ。

3・店主の見解

売り場よりも奥にある、畳の敷かれた部屋。
一護、織姫、石田、チャド、そして店主の浦原が、ちゃぶだい卓袱台を取り囲むようにして座っていた。
浦原の後ろには、ジン太と雨（ウルル）が控えている。

その場にいる者はだれも、口を開かない。
先程から聞こえてくるのは、静かに時を刻む時計の音と、浦原がお茶を啜る音のみ。
他の４人は、ただじっと浦原を見つめている。

そんな静かな空間に、突如（とつじょ）、変化が起きた。

ぴーーーーーーーーーっ

何ともけたたましくマヌケな音が、その場に響いた。
それと同時に、一護と石田がずる、と滑る。
それを見ながら雨（ウルル）が、静かに言う。

「お湯、沸きました。」

そう。この音はヤカンの音であった。

とてとてと、雨(ウルル)がヤカンをかけたコンロの火を止めに、台所へ向かう。

「〜〜〜っ！！」

一護が握った拳を振るわせて、なにかに耐えているような仕草をしていた。

ちなみに、額には青筋がはし趨っている。

「まぁまぁ黒崎さん。ここはあっつ〜いお茶でも飲み直しながら、話をしましょう。

雨(ウルル)〜、ついでにお茶を入れなおしてくださ〜い。」

おちゃらけた声で浦原が言うと、石田が「もう待てない」とでも言うように口を挟んだ。

「浦原さん。話があるんでは？」

「もちろんありますとも〜。でもそれは、お茶が入ってからでも遅くはないでしょう？」

まぁ、ほんの少しですから、と浦原は幾分も変わらない気楽な声で石田をなだめ、石田はそれにひとつ溜息をつく。

その横で織姫が、「私、チョコレート緑茶飲みたいな〜・・・。」と呟いていたが、誰も反応しなかったという。

「どうぞ。」

少し経って、ほかほかと湯気の立っているお茶とお饅頭を持って戻ってきた雨(ウルル)は、そっとお盆を卓袱台の上に乗せてから、お茶を1人ずつ配っていく。

「ありがとー。」
「すまない。」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
返事をしたのは織姫とチャドだけで、一護と石田はただ、浦原を睨むほどに見つめていたのだった。

「いやですねぇ。そんなに睨まないでくださいよォ。怖いじゃないですか。」
扇子で口元を隠し、照れているように笑う。
その様子を見るに、絶対に真剣ではないことは容易にわかるほど。
漫画であれば、浦原の頬はきっとマルほっぺに描かれているはずである。

石田は呆れるように、溜息をついた。

皆がお茶をひとくち、ふたくち飲んでいる間。
お饅頭を食べて「おいしー!」と叫んでいる織姫を見て嬉しそうに笑った浦原は、一気に湯呑みを煽(あお)って一気にお茶を飲み干すと、「では」と口を開いた。

さっきと打って変わって真剣そうなその声に、織姫以外は気を引き締めてそれに耳を傾けた。
織姫はというと、口にお饅頭を詰め込んだ状態で、話を聞こうとし

ている。

「みなさん、最近の異常気象が続いているのは、気付いてますよね。」

「ああ。まだ8月だってのに、真冬以上の寒さなんだろ？
確か、計測史上初の寒さだって、ニュースで言ってたぜ。」

浦原に答える一護の言葉に賛同するかのように、他の3人が頷く。
ええ、と頷いた浦原が、さらに続けた。

「世間では気象的、はたまた科学的に解明しようと躍起（やっき）になっているようですが、唯人（ただびと）では解明できません。
なぜかわかりますか？」

「霊、又は虚（ホロウ）の仕業だから、ですよね。」

「ピンポーン！大正解ッス！！さすが石田さん。」

石田の答えに声高々と正解を叫ぶ浦原。
その背後には紙吹雪が舞っているようにも見えた。

しかし浦原はすぐにがらりと声音を変え、一護達に顔を寄せて真剣に話し始めた。

「そう。最近はどこにいっても、同じような霊圧を弱〜く感じるんすよ。恐らくきっと、その霊圧が気温を下げているんではと考えているんです。

ま〜だ詳しく調べてはいないんですがね。」

「調べてねーのかよ！！」

浦原に突っ込みを入れる一護。まぁ、気持ちもわからなくもない。

しょうがないでしょう、と浦原はお茶のお代わりを淹（い）れながら言う。

「『声はすれども姿は見えず』ならぬ、『感じはすれども判別できず』って言う状態なんすから。

これから本格的に、キッチリと調べようと思ってたところなんですよ。

まぁ、こんなことが出来る人ってのは、1人しか思い浮かびませんがね・・・。」

へぇ、という顔をしている一護とチャドと織姫。
ただ1人、浦原と同じように思っているらしい石田が、なにやら思い詰めたかのような顔をしていた。

話し合いを終えて、一護達は浦原商店を追い出されていた。

「思うところがあって、今、夜一さんに尸魂界に行ってもらってるんですよ。
とりあえず、早めにわかるようにしますので、今日のところは解散ってことで。」
浦原にそう言われて、体よく追い出されてしまったのだ。
否、テッサイに放り出された、の方が正しいだろう。
呆気にとられているうちに、いつの間にか外にいたというのが現状である。

「・・・・とりあえず、浦原さんの調査を待とう。」

「そう、だな。だよな。」
「じゃあ、その時に。」
「・・・・・・。」
「・・・・石田君？」
始めに口を開いたのはチャドで、それに相槌をついたのは一護。
返事をした織姫は、ずっと口を閉ざしている石田に声をかけたのだ。

「え？あ、そうだな。じゃあ、お先に失礼するよ。」
「うん、また後で。」
「おぅ。じゃーな。」

雪が降る寒い中、４人はそれぞれ家に帰っていった。

やや遠い場所に立っている電信柱の上から、“小さな影”にその様子を見られているとは知らずに。

3・店主の見解（後書き）

なんだかだんだんと、クオリティーが下がってきている気がします。
すみません…。

浦原さんの考えは、いつもぴたりと会っている気がします。
結構すごい人なんだと思っているんです、私は。

ここまで読んでいただいて、ありがとうございます。
感想をいただけるととても嬉しいです。暇でしたら是非、お書きください。

次回、“小さな影”が現世で初めて、事件を起こします。・・・・
たぶん。
きっと、次回では残酷な描写が入ると思いますので、お気を付けください。
（入らないかもしれませんし、それほどでもないかもしれませんが。）

年の初めに更新できれば良いかと思っています。

4・始まりと、告白…？（前書き）

どうも今晩和。
もの凄い調子がのっていて、年明け前に書き終えちゃいました。
私としては、絵も描きたいんですが……。

そしてついに、物語が動き出します。

いつものことながら、何かヘンな言い回しや誤字脱字がありましたらお教えください。

では、どうぞ。

4・始まりと、告白…？

真冬のような風が吹き荒ぶ、夏の寒い寒い夜。
息がそのまま凍ってしまいそうな寒さの中、さすがに誰も、何も出歩いてはいない。
姿も見せない。

昼は賑わっていた、誰もいなくなった公園。
敷地内にある、小さな噴水。
昼では綺麗な水飛沫（みずしぶき）を上げていたそれは、夜もとっぷりと暮れた今は止まっていて、池のように水が溜まっているだけだ。

その傍には、小さなベンチがひとつだけ、ポツンと置かれている。
ややペンキが剥（は）げているそのベンチの上で、なにかが動く気配があった。

ちょっとだけ、訂正しよう。

1人だけ、そのベンチで寝ているのを発見した。
仕事の帰りに、酒でも煽（あお）ってきたのだろう。
見た目中年のサラリーマンが顔を赤くさせ、大きくも小さくもないいびきをかいている。
頭の下には、枕の代わりであろう通勤鞄が、歪（いびつ）な形になっていた。

よくもまぁこんな寒空の下で、そこまで眠れるものだ。
作者としても不思議である。

寝ている酔っ払いのサラリーマンが、くしゅん、とクシャミをした。
さすがに寒いのだろう。
「さむ……。」と呟きながら、体を捩(よじ)る。
すっかり冷え切ってしまった両腕を体の下へ入れるようにして、はぁ…と溜息をつきその格好で落ち着く。

……が。

「……さっむ！！」

男はそう叫んで飛び起きた。
「なんれ俺、こんなところでくぉんな時まで寝てんらぁ？！」
まだ酔っているらしい。呂律(ろれつ)が正常に回っていない。
「あ～…課長の所為だこんちくしょう！！」とさらに男が叫んだ時だった。

男の近くで、ピシリ、と何やら固いような微(かす)かな音がした。男はまだ気付かない。
同時に雲が星や月を隠し。
吹いている風も一段と強く、冷たくなっていく。

未だに、ピシ、ピシという先程のものと似たような音が辺りに響いている。

「ん……？」
その時になって、男がやっと音に気付いた。

男が、その音の出所を探すようにキョロキョロと首を巡らせる。
その場所は、すぐにわかった。

「……え？」
広場にある、小さな噴水だ。
溜まっている水が、目に見えるほどの速さで凍っていくのである。
それだけではない。
地面さえも少しずつ、凍っていくのである。
それはベンチから見て噴水の反対方向、つまり公園の出入り口の方からだ。
地面を覆う氷がベンチに到達した時、氷を何かで削るような音と、裸足で歩くような、ぺたり、ぺたり、と言う足音が微かに聞こえ始めた。
男は怖いのか、噴水の方を向いたまま振り替えられない。
ぺたり、ぺたり。
小さな足音が近付いてくる…。
少しずつ、少しずつ…。
ぺたり、ぺたり、ぺたり、ぺたり。
少しずつ、しかし確実に近付いてきたその足音が、男のすぐ後ろで止まった。

「こんな時間なのに、まだ、いたんだ。」

耳元で子どものような、アルトの声が聞こえたと思った瞬間、男は全ての動きを止めた。

その数時間後。

日が昇り、幾分か暖かくなったその場所に、女性の悲鳴が響いた。

※※※※※※

７：００ａｍ

目覚まし時計が枕元で、起きる時刻であることを知らせるように、喧(やかま)しく騒ぎ立て始める。

う～…、と布団の中で唸りながら、その音から逃れようと何度か寝返りを打つものの、当たり前だが一向にその音は止まず。

のそりと腕を布団から出し、目覚まし時計を止めようとその近くをぺたんぺたんと彷徨(さまよ)わせる。

何度か時計に手が当たりはするものの、音を止めるスイッチが小さいためか、なかなか音は止(や)まない。

仕方なく、その腕は時計をガッチリと掴み、布団の中へと引き込んだ。

布団の中に入ったことで、目覚まし時計の音は、外からならば小さくなったように聞こえる。

そして、その布団の中でベルを止めたのだろう、喧(やかま)しい音は聞こえなくなった。
もそもそという布団の中で動く音がした後、また、静寂が訪れる。
しかし、目覚ましはそれだけではないことを、数十分後に知ることとなる。

7：30am

ドタドタドタ、と乱暴に階段を駆け上る音が響いてきて、否応にも目が覚める。
間もなく来るだろう『目覚まし』を迎えるために、むくりと身を起こした。
ウザったいだけの存在がドアを蹴破るまでのごく僅かの間に、オレンジ色の頭を掻きむしりながら、小さく欠伸をする。

そして、遂にその時が来た。

「グッモーニン！いっち、ぐぉっ」「グッモーニン、バカ親父。」
飛びつかんばかりにドアを破ってきた影に、一護は目覚まし時計を突き出す。
その時計はピンポイントに、ドアを破った影・父親の一心の顔にめり込んだ。

ドテッと床に倒れる一心を脇目で見ながら、一護は時計をティッシュで拭く。
その額には、青筋がいくつも浮かんでいる。

一心がぐぐぐ、と顔を上げていった。
その顔にはくっきりと、時計の跡が付いている。
「……やるな、息子よ……。もう、俺から教えることは、何もない……。」
「お前から真面目なことを教わったことなんてねぇよ、ボケ。てかまだ寝かせろよ。俺はまだ冬休み……じゃなくて夏休みだってのによ。」

あまりの寒さに、一護は夏休みを『冬休み』と言い間違えてしまった。
それに一心は「や〜い、間違えてやんの！」と床に伏せながらちょっかいを出し、それを聞いて怒った一護に頭を踏まれた。
床に鼻をぶつけて「んぶっ」とヘンな声を出した一心は負けじと、
「だがなぁ……」と声をくぐもらせながら続けた。

「俺の可愛い可愛い遊子にな、『朝ご飯できたからお兄ちゃん起こしてきて』ってお父さん、頼まれちゃったんだもん。」
「大の大人が『だもん』っつっても可愛くねぇよ。てかキモい。てか起こすなら普通に起こせよ。」
一心を踏んづけたまま器用に着替えている一護は、はぁ、と溜息をつきながら言った。

こう言ってもおそらく、明日には同じ事が繰り返されるんだろうと考えていたのだ。

そんな自分がなんだか、とても可哀相に思えてしまった。

着替えが終わって、一心をそのままにしながら下のダイニングに降りる。
すると、朝ご飯の良い匂いと共に、元気で明るい声が一護を迎えた。
「あ。お兄ちゃん、おはよう。」
「おはよう遊子(ゆず)。」

双子の妹の姉・遊子に、炊きたてのご飯がよそわれた茶碗を手渡せられながら、挨拶を返す。
すると、今度はその妹である夏梨にも話しかけられた。
「おはよう、一兄。今朝も大変そうだったね。」
「おはよう夏梨(かりん)。確かに大変だった。」
茶碗をテーブルに置いて椅子に座りながら、こちらにも返事をした一護。

そして、椅子に腰を落ち着けたのと同時に、付けていたテレビから、明るい感じの音楽が流れ出た。
ニュース番組が始まったらしい。

茶碗を持って、おかずの塩鮭をほぐして口の中に入れながら、ちらり、と少し離れたテレビの方へと視線を移す。

短めのオープニング映像の後に、今朝の内容であろうニュースが短めに話される。
近頃の不景気と、これもまた近頃の異常な天気の話の後の映像に、一護は「え?」と口に出してしまうほど驚いた。

『公園にいた男性、凍らされて全身凍傷の重傷。』

朝食もそこそこに、すぐにケータイが置いてある自分の部屋へと走った一護。
すぐさまダイヤルし電話を掛ける。
と、ケータイのボタンを押そうとしたのだが。
果たして、どこへ電話を掛けるべきか。
悩みに悩んだ末、幼馴染みのたつきに掛けることにした。
なぜたつきか。
それは、織姫の電話番号を知っているからだ。
こんなことをいち早く話せるのは、意外にも織姫だったりする。
普段、あんなふうにほわほわしていながらも、いざというときには結構心強い。
男では気付かないようなちょっとしたことでも、すぐに気付いて教えてくれるのだ。
しかし、あることに気づいた。
「……たつきのヤツ。変な勘違いでもおこさなきゃ良いけどな……。」
そう。己(おのれ)が死神代行をしていることを知らない人間からしてみれば、これは一種の告白になるのではないだろうか?!
……と、一護は思い当たってしまったのだった。

でも、こんなこと考えてる暇はない、と考え直し、意を決してダイヤルする。
しばらく呼び出し音が聞こえた後、もしもし？という声が耳に入った。
「もしもし、黒崎ッスけど。」
『あ、その声一護？どうしたの、こんな時間にさ。』
どうやら、本人だったらしい。
何ともお気楽そうな声のたつきだった。
「いや、その……い、井上の電話番号…教えてくれるか……？
どうしても話しときたいことがあってさ……。」
一護にしては珍しい消え入りそうな声に、たつきは何か考えているように『う～ん……』と唸る。

「な、なんかマズイのか……？」
『え？いや、なんでもないよ。
そりゃあ、あんたの一大決心を挫くようなことではあるんだけどさ……。
ま、ちょっと待ってな。』
たつきのその言葉の後、カチャ、と受話器を置くような音がしたと思ったら、保留の際のメロディー音が流れ出した。
たつきのヤツ、やっぱり誤解してるな～、と思いながらそのメロディーに耳をすます。

少し可愛らしく、保留音にしては珍しい音楽。何かが跳ねているかのような、そんな印象の曲だ。
「……確か、『金平糖の踊り』…だっけか？（たつきにしちゃあ、なんか可愛過ぎるな…）。」
やちるが喜びそうだ、なんて考えていると、意外にも早くにその音楽は途切れた。

電話帳でも持ってきたのか？と思った一護の耳に届いてきたのは。

『おは、おはよう…ゴザイマス……黒崎君。』

「……え？井上……？」

織姫の声だった。

経緯（いきさつ）を聞けば、どうやら織姫は昨夜からたつきの家に泊まっていたらしい。
他にも国枝や本匠などもいると言うことだから、いわゆる『勉強会という名のお泊まり会』のようなものだとのこと。

それは良いとして、「ところで。」と一護は本題に入った。

「井上は今朝のニュース、見たか？」
『えっと…〇〇党で内部分裂がどうのこうの……？』
「……いや、そっちじゃなくて……公園で氷漬けにされた男の話。」
『あ、うん。その話も聞いたよ。全身凍傷だなんて……結構酷いと思うけど……。』
他にも何か言いたそうな言い方をしたので、一護はそれを促した。
『あのね…“全身凍傷で重傷”、ていうのがちょっと不思議なの。』

「……そういえば……。」

普通、全身が凍傷を起こしていれば死の淵を彷徨(さまよ)うほどのもの。
なぜなら、体の表面積のうち3分の2の皮膚組織が死ねば、皮膚呼吸を行うことができないために、助かる確率もかなり下がると言われているのだ。
それなのに『重傷』……つまり、大ケガではあるが死ぬ確率は低い、ということなのである。

一護は、さすがに手伝いをしていないと言っても、医者の息子であるために『重傷』と『重体』の区別ぐらいはわかるのだ。
……一般人でも知っているだろうけども。

「……気になるな、それ……。」
『どうする？調べてみる？』
「そうだな……井上は、石田の連絡先知ってるか？」
『うん。前に教えてもらったよ。』
「じゃあ、石田の方に『9時に、例の公園の前に集合』ってことで、連絡入れといてくれ。
俺はチャドに入れる。」
『わかった。9時に、公園前だね。それじゃあ、また後で。』
「おう、じゃあな。」
一護はそう言って、電話を切った。

さて。今の時刻はおよそ8時２０分。
電話してから歩いて行っても間に合いそうだ。

一護は「よし。」と呟いてから言うと、念のため、とギャアギャア五月蝿(うるさ)いコンを捕まえて口の中に手を突っ込み、義魂丸を取り出すと、それをポッケに入れてからまたケータイのキーを押した。

チャドへ連絡するために。

４・始まりと、告白…？（後書き）

こんなかんじになりました。
前回に言っておいてなんですが、流血はしてませんね……なんかスミマセン…。

今までで最長となりましたね、４千字以上ですよ！
ただ、上手くまとめられなかっただけな気もしますが……。

さて次回、現場を調べて意外な人と遭遇！？……するかも。
次回の更新はこんどこそ、年明けになると思います。

何かご感想があれば、どうぞお書きください。
喜んでお返事を書かせていただきます！

では。ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
次回もまた、お楽しみに。

5・義魂丸の叫び（前書き）

ど、どうも今晩和・・・。年をひとつとりました、氷翠です。

「年明けに」とか言っておきながら、1月も下旬に入ってしまいました・・・すみません・・・。

ネタはあったんです。ただ、文章にできなかったんです。

ただでさえ文章力が乏しいというのに・・・。

え～・・・、いつもの如く、ヘンな言い回しや誤字脱字がありましたらお教えください。

今回は一段とヘンな文章となっておりますが、どうぞ。

5・義魂丸の叫び

「おっと、ここだったな……ってうっっわ！！警官がいんじゃねぇか…！」

ただいまの時刻、Ａｍ　８：００、５分前。

例の公園の前に着いた時、さすがに驚いた。

凄い人数の警官たちが、公園の敷地にいるのが見えたからだ。

ここまでの警官の数、俺、始めてみるような気がする。

出入り口にいる警官達を見てゲンナリしていると、１人の警官と目があって……。

ギロリ、と「あっち行け。」とでも言うように睨まれた。

「……（うっわぁぁ～結構怖(こえ)ぇ！）。」

こうも大人数揃っているところで睨まれるとかなり怖い、ということを心底思った。

内心冷や汗を滝のように流しながら固まっていると、いきなり襟首を掴まれて曲がり角の影に引っ張られる。

「全く君ってヤツは……あんな真ん前でボケッと突っ立っている事ないだろう？」

「……石田、それにチャドも……。」

聞こえてきた声に唖然としながらも、ほっと息をついた。

どうやら、引っ張り込んだのはチャドのようだ。

「おはよう、黒崎君。」
「井上……。」

一護が織姫にも気付き呟くと、「それで。」と石田が言葉を発する。

「どうしようか、この状況。」
「調べてはおきたいよね、中。」と織姫。
「つっても、ぜってぇ通しちゃくれねぇだろうな。」と一護。
「……彼らの、仕事だしな…。」とチャド。
皆それぞれ、う～ん、と頭を抱える。

「強行突破ってのは…。」
「駄目に決まってるだろ。そんなリスクの高いこと、するわけない。」
「だよな～……。」
一護の呟きに、石田が力強く反対する。
当たり前だ。

「……とりあえず、少しの間、様子を見ないか……？」
「そ、そうだよね。今ここで悩んでるより良いかもしれないし！
もしかしたらあとちょっとしたら、みんな帰ってくかもしれないよ？」

Ａｍ　８：３０

雪が降り始め、それぞれの頭に薄～くそれが積もっている。

今までの間に、子どもが何人か公園に訪れ、その度に警官が説明をし、子どもたちを帰らせていた。

子どもたちはみんな、納得のいかない顔をしながらも、警官の言うとおりに公園から遠ざかる。

そんな様子を５回ほど見た時、遂に石田が「……仕方ない。」と言いだした。

「……最終手段だ。頼めるか、黒崎。」

「あん？何をだよ？」

「……入れそうなところを探す。黒崎は先に死神になって、入ってくれないか？」

「……別に良いけどよ…俺、最近こんなの多くねぇ？」

「気の所為だ。早く行け。」

「へーへー。じゃあ、噴水近くのトイレで待ち合わせ、で良いか？」

石田に文句を言いたそうな顔で、落ち合う場所を聞きながら持ってきたコンの義魂丸を、ゴクリと飲み込む。

すると、大きな音をたてて、死神姿の一護が体から抜け出した。

もちろん、魂魄が出て空っぽになった体には、コンが入っている。

コンは、「いってぇ～…」と腰の辺りをさすりながら起き上がった。

一方、石田の方は、死神化した一護に文句を言っていた。

「良い訳ないだろう。先に現場に行って、それらしいものを探しておいてくれ。」

「それらしいものってなんだよ…。」

「つべこべ言わずに、早く行け。そのぐらいは自分で考えるんだね。

」
「〜〜っ！ヤなヤツだよな、ホンットによ……。」
拳を振るわせて負け犬が吠えるような言葉を呟きながら石田を睨むも、その本人はまったく気にしていない。
隣では、織姫が一護を落ち着かせようとしている。
織姫の制止もあって、幾分か落ち着いたらしい一護は、舌打ちをしたあとにコンを見やった。
「……チッ。
おいコン、俺の体で変なことするんじゃね「うっは〜んｖｖ秘密の花園。神々の谷間〜ｖｖ」…って言ってる傍からやってんじゃねぇぇ！バカヤローーっ！！」
織姫の胸に飛び付こうとしているコン（もとい自分の体）の上着の襟（えり）を掴み、動きを止めたところで頭を思いっ切りぶん殴った。
「〜ってぇな一護ォ！！
おめぇ自分の体なのにホント良くそんな本気で殴れるよな！！おめぇの体だぞ、オイッ！！」
「うるせぇ！変な行動されるよりかず〜〜〜〜っとマシだからだっ！！」
涙目になり、頭の殴られた箇所に手をやりながらコンが叫ぶと、一護は顔を赤くし、まだ力一杯に拳を握りながら返した。
一護の考えは、ある意味真っ当なものであると思う。

「おい黒崎！！早くしてくれないか！」
「おっと。わりぃ石田。」
イライラしながら一護に呼びかける石田に返事をすると、ふっと拳の力を緩めてコンから視線を外す。
まったくキミってヤツは、と石田に文句を言われながらも公園の出入り口へ向かう。

目の前まで来ても、警官は誰一人として一護の方に目をやらない。
どうやら全員、一護が見えてないようだ。

「あ、そうだコン。」
何かを思いだしたのか、一護は振り返って叫んだ。

「おめぇが隠し持ってた菓子、腐ってたから全部捨てっちまった！
ワリィ！！」
「な……にぃっ！！俺のもうひとつの楽しみをぉぉっ！！」
警官がいる手前飛び出すわけにも行かず、コンは石田とチャドに抑
えられながら、地団駄を踏んで一護を見送ったのだった。

※※※※※※※※※※※※※

「さて、と。ここか？う～……、一段とここは寒いな……。」
現場の噴水の場所に着いた一護。
敷石の間から伸びている雑草の表面にはいまだに霜が降りていて、
どれだけ寒いのかが伺える。
凍ったままの噴水の氷が、日の光を反射して無駄に綺麗だ。
警官はなぜかこの場にはいないため、こちらとしても心が軽い。

ーーーーーーまぁ、ほとんどの人間には一護が見えないのだが。

「じゃ、石田たちが来る前にちょっとは調べてみるかな…って、う
ん？」
のびをした一護の視界に、なにやら小さい『何か』が入ってきた。

黒く短い髪。
男子が着るようなジャンパー。
青いジーパン。
首に巻かれているマフラーは、去年のクリスマスにプレゼントしたものだった。

「・・・・夏梨？こんなところで何やってんだ？」
そう、妹の夏梨だったのだ。
地面に張り付いた氷に手をやって何やら考え込んでいるかのようだったが、兄に声をかけられてパッと顔を上げた。
「あ、一兄・・・それは、えっと・・・・。」
言い淀(よど)む夏梨。視線もちらちらと泳いでいる。

どうしても言えないような様子だったので、一護は『兄』として家に帰らせることにした。

夏梨の前まできてしゃがみ、視線を合わせる。
「こんな寒いところにいると風邪引くぞ？早く帰って暖(あった)まっとけよ。」
「……でも・・。」
「気にすんな。よくわかんねぇが、俺がどうにかするさ。」
「……うん・・わかった。」
長い間の後にやっと頷(うなず)いた夏梨に、一護は「よし。」と言って立ち上がり、夏梨から離れる。

「俺は用があるから、お前ひとりで帰れるか？」
足元にあった氷をガツガツと蹴りながら、一護がそう夏梨に聞いていると、くいっ、と袖を引かれた。
視線を向ければ、夏梨が袖を握っていた。
母親に花瓶を割ってしまったことを言おうとしているような、夏梨

にしては珍しい顔をしている。
「あのさ一兄、実は・・・」
「……どうした？」
「……この、氷、さ・・。」
「冬獅郎君の霊圧がするんだよね？夏梨ちゃん。」
「うおっ！！」「……！！」
一護の後ろから織姫がひょい、と顔を出して言うと、黒崎兄妹はかなり驚いた。
一護は、まるで飛びあがらんほどだ。
しばらく2人は、動悸（どうき）が収まらない胸をおさえて固まっていた。

5・義魂丸の叫び（後書き）

長くなりそうだったので、微妙なところですが切りました、すみません・・・。

前回に言っていた『意外なひと』は、夏梨ちゃんでした～。

（以下、製作秘話です。）

まぁ、いろんな人を思い浮かべてたんですよ？

ひよ里ちゃんとか、観音寺のオッサンとか、ルキアとか、乱菊さんとか。

はたまた『小さな影』本人か。

ちなみに、ギリギリまではひよ里ちゃんでした。

話の内容上、ルキアと乱菊さんと『ご本人』はまだまだ暖めていたいですし、観音寺のオッサンは実を言うとちゃんとキャラを掴めていないので（これはこれでマズイか）。

しかし、書いているうちに閃いちゃったんですよ。「夏梨ちゃんにしようじゃないか！！」と。

で、お風呂に入りながら、通学電車に乗りながら、講義を受けながら話を整え、彼女にしました。

どんなふうになるかは、お楽しみです。

今回も読んでいただき、ありがとうございます。

後書きがこんなに長くなってしまって、申し訳ありません。

ご感想をいただけたらとっても嬉しいです。

次回、早いですが2度目の事件が起こります（決定事項ですよ。どんな事件かは決め兼ねていますが）。

６・２人の戯れと、２つ目の事件（前書き）

どうも今晩和～。氷翠です。

今回はチャッチャカと続きを書かせていただきました。放っておくと忘れてしまうタチなので。

前回のものからの続きです。
微妙なところから始まってますのでご注意を。

それと、今回は直接的な表現はないものの２、３回後には必ず流血表現があるため、とりあえず「Ｒ１５指定」とさせていただきました。
けどまぁ、性行為シーンとか書く気はないです、まったく。あ、でも自傷シーンはある意味あります。

そんなこんなで、長くなりましたね。
ヘンな言い回し、誤字脱字がありましたらお教えください。

では、どうぞ。

6・2人の戯れと、2つ目の事件

「……ったく井上・・。いきなり驚かせんなよ・・マジでビビった・・。」
「ごめん。夏梨ちゃんも、大丈夫？」
「うん。」
すまなさそうに聞く織姫に落ち着いた夏梨が答えると、石田の織姫を呼ぶ声が聞こえてきた。
「井上さん、何かあったら危ないって言ったじゃないか。」
「あ、石田君。ごめんね、夏梨ちゃんの影が見えたから・・。」
織姫が謝ったため、石田はそれほど追求はしなかった。

ところで、と一護が声を上げる。

「……冬獅郎の、霊圧だって・・・？」

沈黙が辺りを包む。
雀(スズメ)が少し離れたところで、ぴょんぴょんと飛び跳(は)ねながら、少ないエサを探しているのがその鳴き声でわかるほどだ。
辺りに満ちた沈黙は痛いばかりで、一護以外は皆、痛そうな顔を浮かべ、一護は、なにか腑(ふ)に落ちないような様子で眉を顰(ひそ)めている。
日番谷冬獅郎の霊圧は、氷雪系最強の斬魄刀『氷輪丸』を操ることのできる霊圧。
最強と呼ばれる斬魄刀を扱う霊圧は、決して嘗(な)めることなどできない。

なぜなら、その力を用いれば一瞬で人を凍らせることなんて、容易(たやす)いことなのだ。
そんな力をここで感じるとなればもちろん、「『全身凍傷事件』の犯人は日番谷」ということになる。
……そうなったって世間では信用してはもらえないのだろうけど。

「……俺は、あいつがやるとは思えねぇ。」
「……あたしも。そう思いたい。」
一護と夏梨が声を揃えて言った。
一護ははっきりと。夏梨は控えめに。
それぞれの瞳には強い光が、確かに灯っている。
実は織姫は、そんなところがとても似ていると思うのだ。

「何を根拠にそう言うんだい？黒崎。彼の霊圧が残っているというのに？」
眼鏡をキラリと光らせ、石田が一護に目をやって聞いた。

ここに残っている霊圧は、確かに日番谷のものだ。
霊圧感知が得意ではない一護にはよくわからないようだが、彼以外は皆、ハッキリと感じていた。
そしてそうと知っていても夏梨は、『日番谷ではない』と言った。

「あいつは、そんなことときっとしない。そんなこと、できるようなヤツじゃないと思う。」

静かで、それでいてもまっすぐな声だった。

「夏梨ちゃん・・・！」
織姫が嬉しそうに笑いながら、ぎゅ、と抱き付くと、夏梨は小さな

声で悲鳴を上げた。
「そうだよね、やっぱりそう思うよね夏梨ちゃん！！」
「ま、まぁ・・。と、とりあえず落ち着いて・・・そんでもって放してくれない？」
案外苦しいのだろうか、夏梨はどうにかして織姫から逃げだそうと藻掻(もが)き始めたのだが、結構ガッチリと固定されていてなかなか抜け出せないようだ。その様子はどうも、2人がじゃれ合っているようにしか見えない。
一護はそんな2人を隣から眺め、「……なんで夏梨が、冬獅郎のこと知ってんだ？」と呟いていた。
そんな、端(はた)から見ればとても平和そうな光景を見て石田は、ふ、と息をつく。
「……とりあえず、このことは浦原さんに報告しておく必要がある。早く戻ろう。」
「……ああ、そうだな。一護、戻るぞ。」
「お、おう。夏梨、井上。帰るぞ。」
「「はぁ～い。」」

ゾロゾロと帰路につこうとしている一護たちの後ろ姿を、じっと見つめている影があった。
「……そんな簡単に済むもんやない気ぃすんねんけどなぁ、ウチ。」
そう呟いた”小さな影”は、タン、と踏み切ると姿を消した。

※※※※※※※※※※※※※※

その夜。

真夜中も過ぎた、誰もいないかのような時間。
銭湯であるここには、風呂掃除をしている自分以外の姿は全く見られない。

真夜中の銭湯ほど、怖いところはないと自分は思う。
確かに、他にも怖いところなぞたくさんある。

夜の海、夜の山。
夜の公園、夜のトイレ。
そして……誰もいない真っ暗で大きな自宅の銭湯（みせ）。

なぜ真っ暗かと言えば、父親が『光熱費が勿体（もったい）ない』と言って、営業時間を過ぎると完全に銭湯（みせ）の照明を落としてしまうためだ。
おかげで掃除をする時は、防水機能のある懐中電灯を持っていく始末。
子どもが掃除するってえのに、どこにそんな酷いことをする親がいるってんだ！！

……少なくとも、うちにはいる。

この際ハッキリ言わせてもらおう。
こんな怖い思いをしてまで、なぜ家業である銭湯を自分が継がねばならないんだ！！

「……はああぁーーー。」

大きな溜息をついたのは、その銭湯の跡取り息子。年の頃は、まだ二十代の手前ほど。
今までのはすべて、彼の心の叫びだ。

「……うわぁ・・息が白い・・・う〜〜っ！早く済ませて寝よ寝よ。」

男が改めてデッキブラシを握ったその時だ。
ただでさえこの寒さでキンキンに冷たくなっていた水道の水が、ホースから流している状態でいきなり凍った。

「……あれ？え？ちょっと困るぞそれ！！てかなんで凍ってんの？さっきまでちゃんと流れてたのに？！」
わたわたしながら男が騒ぐ。かなり五月蝿（うるさ）い。
その後ろで、体を洗うための水道管が、僅かに膨らんだ。

瞬間、バン！とそれは勢い良く破裂した。
「ひゃああぁっ！！」
男はその大きな音に、悲鳴を上げる。

しかし、銭湯とは幾つもの蛇口、もとい水道管があるところ。
破裂は一発ではなく、立て続けに続く。
その度に男は頭を抱え、悲鳴を発した。

「うるっさいなぁ。斬られるヤツは黙ってなよ、お前。」

いきなり、どこから入ってきたのか、小さな子どものような声が後ろから聞こえたのだが。

え？と思った時には遅かった。

左の脇腹に激痛がはしり、目の前が真っ赤になる。

ゆっくりと力が抜けていき、ドサ、と倒れ込むと一瞬だけ、その子どもが見えた。

血で銀色の光を濁らせている刀を持つ、所々に血が付いた、真っ白い肌で銀髪の子ども。

その一瞬の後、俺の視界は真っ暗になった。

「俺はまだ、そう簡単には捕まらないよ？」

見た目相応に口に弧を描(えが)かせ、子どもは言った。

6・2人の戯れと、2つ目の事件（後書き）

いかがでしたか？

……ん？

「『銀髪で白い子ども』の口調がヘン」、ですか？

それは良いのです。そういう設定ですから。

何かわからないこと・疑問点などありましたら、どうぞ質問してください。

先のネタバレにならない範囲で、お答え致します。

では、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

次回、今までまったく連絡がなかった尸魂界から連絡が！！……あるかも。

少なくともその直前までは書くと思います。

7・化け猫の帰還（前書き）

え～……お久し振り、です……。
更新が遅くなりまして、申し訳ありませんでした……。

更新が遅れた理由はいろいろあります。
試験が近かったり、悩みどころがあったり。

そして、近いうちに学年末試験があるので、それに向けて勉強もせねば……。
なのでちょっと、今回のようなことがあと少し続きます。
本っっ当に申し訳ないです……！！

ちなみに、『悩みどころについて知りたい』という物好きな御方がいらっしゃれば、どうぞ後書きの最後で。

前回の予告に、沿ってるような沿ってないような、そんな微妙なお話です。では、ヘンな言い回しや誤字脱字がございましたら、いつもの如くご連絡ください。

7・化け猫の帰還

時は少し戻り、その日の昼過ぎ。

浦原商店には再び、一護たちが集まっていた。
いまだに解析中とのことで、浦原とテッサイはどこか奥の方に引っ込んでいるらしく、雨(ウルル)が2人を呼びに言った。
なので、そこにいるのはジン太である。
卓袱台(ちゃぶだい)の上にあるのは煎餅が盛ってある皿のみだったが、誰もその皿に手を出そうとするものはいなかった。
夏梨や織姫さえ、その煎餅には手を出していない。
雨(ウルル)はなかなか戻ってこず、時間だけが過ぎていく。

コホン、と誰かが咳払いをした。

その直後。

「イヤ〜、すみませんねぇなかなか終わらなかったもので〜……何やってんスか？黒崎さん。」
「……いっつ〜〜っ」
なぜか一護が寄り掛かっている襖が勢い良く開き、そこから浦原が現れた。

一護はいきなり開かれたために反応が遅れ、柱に頭を強打した。
ガツッ、と良い音を発したその頭を抱え、暫(しばら)く悶(もだ)える。

その様子を見て浦原は呆れたような声で言った。
「しょうがないッスね～……テッサイさ～ん。黒崎さんの手当て、してやって下さい。」
「承知。さぁさぁ黒崎殿、こちらに！！」
「え？いや、ただぶつけただけだし、ほっといても大丈夫……「なにを申されます！？頭をぶつけたからには放ってはおけませんぞ！！さぁ早くこちらに」……ハイ・・・。」
涙目になりながらも断ろうとした一護だったが、テッサイの迫力と威圧と顔（？）によって言うことを聞いてしまった模様。

ちなみにその様を、浦原はニコニコ微笑んで「いってらっしゃ～い。」と言いながら、ジン太は「ざまぁみろ～。」とからかいながら（何故？）、雨（ウルル）はただじっと見つめなにも言わずに、石田や織姫達は唖然としながら見送ったのだった。

「……あ、あの・・黒崎君、大丈夫ですか・・？」
怖ず怖ずと織姫が浦原に声をかけると、聞かれた浦原は口元に閉じた扇子を当て、軽そうに答えた。
「だいじょうぶでしょう。恐らく軽い打ち身でしょうから、冷やしておけば良くなるはずです。」
「……よくわかるな、浦原さん。」
「そりゃあもう、大昔によく夜一さんに作られたんっスよ～、同じようなモノを。」
珍しくも、チャドが浦原に聞いてきた。
浦原はそれに、『いやぁ～、スンゴイ痛かったッス・・・。』と、当時の痛みを思い出したのか帽子に手をやりながら呟く。

「……儂がなんじゃって？」

その声と共に、浦原が入ってきた襖とは違う方向、店先の方の障子が開いた。
ちょうどそちらに背中を向けていた織姫がふと振り返って見上げるも、そこには何もいない。
不思議に思いながらスッ、と視線を下げる。

そこには、金色の瞳を光らせた黒猫が障子を閉めている姿があった。
織姫達は口をそろえて声をあげた。

「「「夜一さん？！」」」

「うむ。久しいのぅお前たち。…………で？お前は今なにを言っておった？喜助。」
「…………えっと〜〜〜〜。」
「どうせ儂の悪口でも言っておったのじゃろう？喜助、あとで覚えておくと良いわ。」
「…………スイマセン・・・。」
夜一は、フン、とそっぽを向いた。

猫には表情筋がないために何を思っているのかは見てわからないが、パタンパタンと勢い良く振られている尾やぴくぴく動く耳、震える声音から、どことなく怒っているかのように思えた。
“見た目は”ただの黒猫に頭を下げている浦原のその姿は、どこか滑稽だった。

※※※※※※※※※※※※※※

辺りにはザリ、ザリという微かな音が満ちている。
その音は、右脇腹を舐める黒猫の舌が動くたびに鳴っていた。
つまり、猫の毛繕いの音である。

そんな微かな音さえ聞こえるほどの、沈黙。
元気印と言っても良いほどのジン太さえ、じっと黙って座っていた。

そんな時。
ガラリ、と襖の開く音が響いた。
一護が頭に氷嚢(ひょうのう)を当て、居間へと戻ってきた。

何でも、瘤(こぶ)ができていたらしい。
あそこまで脅された割にはまったくと言っていいほど異常はなく、
一護はほっとした顔や残念そうな顔に迎えられた。

そこで一護も、座布団に座って毛繕(けづくろ)いをしている黒猫に気付いたのだった。
「あれっ？夜一さんじゃねぇか！！いつの間に・・・。」
「うむ。お主(ぬし)が席を外しておった間に戻ってきたのじゃ。久し振りじゃの、一護。」
「元気そうだな夜一さん。今まで何やってたんだ？」
顔を洗おうとしていた夜一の手がピタリ、と動きを止める。
「……うむ。それを・・・話そうと思ってきたのじゃ。」
声音を若干落とした黒猫に、その場にいた者たちは息をひそめた。

7・化け猫の帰還（後書き）

と、現れたのは黒猫、夜一さんでした。
本当はもう1人現れる予定でしたが、長くなりそうだったのでここで……。
おかげでちょっとギャグっぽくなっちゃいましたね……
『現れるはずのもう1人』は次回かその次、もしくはそのまた次ぐらいに出てくるかと……（長っ！！）
む～～……こんな自分が腹立たしい……。

次回、尸魂界の状況は！？なにが起こったのか！！
……ちゃんと書けると良いなぁ…（粗筋しか決めてないんです）

こんな私、こんな文章ですが、感想をいただけるととても嬉しいです！！
これからもよろしくお願いします。

←《　悩みどころ　》←

実は、お話の本筋を少し変えようか、と思い至ってしまって、四苦八苦していました。
今まで書いていたネタではちょっと在り来たりすぎるかな、と思ったので、少し変えていこうかな、と。
変えた方がちょっと難しくなってしまうとは思うんですけど、それでも、今までに（私自身が）読んだことのないようなお話を書きたくって。ちょっとした挑戦ですね。
そんな挑戦に皆さまを巻き込んでしまう形になってしまいますが、どんなお話になるのか、見守っていただけるととても嬉しいです。
がんばります！！

8・化け猫の報告　見つけた影（前書き）

どうも今晩和、氷翠です。

続きがどうも、微妙に書けないです……。
あらすじしか決めてなかったから、細かいところはある意味ぶっつけ。
打っては消し、打っては消しの繰り返しです……。

でも！！
それで皆さんに少しでも「読み応えあるなぁ……」なんて、ぽやぁんとでも思ってくだされば とても嬉しいです。

さて、今回は。
読んで想像すると、痛い気がするような箇所が、最後の方にあります。
「ケガの名前のオンパレード」、みたいな感じの場所です。
……ってそれだけですけれども・・・

苦手な方は無心になってお読みください。
では、どうぞ。

8・化け猫の報告　見つけた影

数日前、儂は喜助に言われて尸魂界に行って来た。

……べつに、使いっ走りではないぞ？

儂とて最近、砕蜂のことが気になっておったからな。行こうと思っていたちょうどその時に言われたのじゃ。

まぁ、そんなことは良い。

向こうについてすぐ、儂は不思議に思った。

瀞霊廷を囲む塀の内側（つまり、瀞霊廷じゃな。）だけが、何故か妙にキラキラ光っておったからな。

瀞霊廷だけで、西流魂街にはそんな兆候は見て取れぬ。

儂は不思議に思って、いったい何があったのか、西流魂街の者に聞いてみた。

「お主（ぬし）、ちょっと良いか？」

「はい？」

大工か何かの仕事じゃろう、道具箱を肩に担いでいる男を呼び止めた。

「瀞霊廷の様子がおかしいようじゃが、何かあったのか知っているか？」

「いやぁ……それが、俺にもわかんねぇんですよ…。

俺は何かと、護廷隊で『戦闘部隊』と言われる十一番隊から修理の要請が来るんでよく行くんだが、ここ一週間はまったく来ねぇんでね…。

いや、いつもなら3日と開けずに忙しいくらいそんな要請が来るもんだから、ちっと心配でなぁ……

昨日、児丹坊(じだんぼう)さんに中の様子を聞いてみたり、中に入れてくれるようにも言ったんですが……言い方が悪いが、追い返されっちまいましたよ。」
その男は最後、「力になれずすまなかった」と言って去っていった。
儂はその後幾十人もの者たちに、同じようなことを聞いて回った。
しかしそれでも、返ってくる答えは同じ。

『何かあるだろうが、その「何か」はわからない。』

……尋ねた者すべて、じゃ。

儂はしょうがなく、白道門の門番である児丹坊(じだんぼう)を訪ねた。
するとあ奴の周りに、かなりの人集(ひとだか)りができていた。
少し様子を見てみれば、「何故中に入れてくれないんだ！」という言葉ばかり。
よく見れば、瀞霊廷に品物を納めておる商人たちばかりじゃったからな。その者たちは瀞霊廷に品物を入れねば、生活が成り立たぬ者。と言っても、霊圧が高い者はその中のほんの一握りじゃが。

ん？他は何かって？
そんなもの決まっておる、ただ単なる金儲け、じゃな。

……そんなに眉を顰(ひそ)めるな、一護。
いや、元からじゃったか！！はっはっは！！

……怒るな怒るな、冗談じゃ。

話を戻すぞ。
儂はしょうがなくその集団の中に入り、「児丹坊とて、上からの命

でやっていることなのだ」と言ってその者たちを下がらせた。

あ奴の話によると、「もの凄いことが起こっているらしい」という、やや不確かな情報と、「何人たりとも中へ入れるな」という命のみが門番に伝わっているという。

流魂街にいて一番有力な情報を得ることのできる『児丹坊の話』でも、これが限界じゃ。

……いや、本当の一番有力な情報は『空鶴』なのじゃが、なにせどこにいるのかわからん。

時間があれば探しておったのだが、今回はそうは言ってられぬようじゃしの。喜助の様子ではな。

仕方なく儂は、中に入れるよう児丹坊に頼んだ。

自分で見たほうが手っ取り早いからな。

もちろん児丹坊は拒んだ。

それはもう、力一杯に。

「だめに決まっでる！！おらぁ絶対に入れるなっで言われでるて言ったべ！！」

その慌てようは面白いほどじゃった。故に、自分でもわかるほどにやにや笑って言ってやったわ。

「問題あるまい。お主が休んでいる間にすり抜けたとでも言っておけ。

なんならシラを切っても良いぞ？儂はその命が下(くだ)される前からおったのだ、とな。

ほれ、さっさと開けぬか。」

「〜〜っ、なに言われでもおらぁ知らねど。」

「それで良い。ではな。」

児丹坊は門の下をガシッと掴み、ズズズッと力を入れる。

すると少しずつその門が持ち上がり、儂が入れるほどになるとすぐに潜り込んだ。

そうして儂は瀞霊廷へ入った。

背後では門が閉まる、ズシー…ンと言う重いモノが落下するような音が響いている中……

儂は、塀の内側がキラキラ光っているわけを知った。

瀞霊廷のほとんどの建物や瓦礫(がれき)が、氷に覆われておったのじゃ。

端(はた)から見れば『壮観』じゃったが、当事者になれば『悲惨』じゃろう。

見渡せば、建物のほとんどが瓦礫と化して、氷の中に封じ込められておる。

氷の中には、赤い色をしたものもあった。……『それが何か』は、言わずともわかるじゃろう？

儂は、一番隊の総隊長の下へ急いだ。

詳しく聞くには、京楽隊長や浮竹隊長たちよりも、総隊長の方が膨大に情報が得られる場合が多いからの。

しかしその途中、儂はある者に声をかけられた。

「……四楓院夜一……か。」

硬い感じの声に足を止め振り返ると、儂より一回り大きくなった背。

黒髪には牽星箝(けんせいかん)。

六番隊隊長、朽木白哉。そ奴じゃった。

「おー、白哉坊ではないか！！藍染との戦い以来じゃな。久しいのー！！」

儂はそう言いながら、白哉坊の肩をバシバシ叩いてやった。

白哉坊は顔を顰(しか)めながら儂を睨み、

「そうだな。例えお前が尸魂界(こちら)に来ていたとしても、私と会うことはなかったのだからな。

しかし、このような世間話をする暇など今の私にはない。これで失礼する。

行くぞ、恋次。」

「すまぬが。」

はい、と返事をした赤い髪の副官を連れて、去ろうとしておった白哉帽を儂は引き止めた。

「いったい何が起こったのか、聞かせてはくれぬか？儂にはその手の情報が一切ないのじゃ。」

振り返った白哉坊は（嫌そうな顔をしながら）儂をしばらくの間見つめた後に、こう言ったのじゃ。

「お前は、外の様子を見たか？」

儂が頷くと、白哉坊は続けた。

「なら、少し考えただけでもお前にはわかるだろう……誰がこのようなことをやったのか。」

今度こそ、失礼する。

白哉坊がそう言おうとしているのがわかり、儂はその言葉が発せられる前に口を開いた。

「その言葉はつまり、『見たまま』だと言うのだな？
……何者かが謀をしたわけではないのだな？
霊圧なんぞ、やろうと思えば誤認させることとて、できる奴もいるじゃろう？」
「隊長格の者に誤認をさせるなど、それなりの力を有していなければできることではない。
それに、『その時』を『その者の副官』が目撃している。」
「『その時』、とは？」
儂は腕を組み、白哉坊に更に尋ねる。
どこからか、この場に見合う冷たい空気が流れ込んできているが、儂等はそんなこと気にするはずもない。
白哉坊は振り返り、儂の問いに答えた。

「隊員が隊主に四肢を斬り刻まれた時、だ。」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「その事件による重傷者は大多数。
そのほとんどが刀に因る斬り傷、氷漬けにされた際の凍傷と凍傷が悪化したための壊疽による指の欠落、剰りの寒さによる皮膚の裂傷、及び表皮剥離……他にも、数は少ないが低体温に因る身体の機能の低下、などもあったらしい。
しかし、そこまでの人数が重傷を負いながらも、死亡者は奇跡的におらぬそうじゃがな。

そして、一週間ほど前にその犯人が尸魂界から消えて、負傷者の治療や各隊の現状確認などがやっと落ち着きを見せた今、六番隊が中心となって『その者』の行方を調査している、とのことじゃ。」

話はそこで終わりなのか、夜一は口を閉ざした。
その後に声を発する者もいない。
皆はただ押し黙る。
沈黙が部屋を包み、ただ時間だけが過ぎていく。
湯呑みに入れられたお茶はすっかり冷え、水道水と同じほどの冷たさとなっていた。

「……ひでぇ・・。」

そんな中発せられた、小さい小さい、本当に小さな声。
顔色を真っ青にさせた夏梨の口から、ポロリと零れた言葉だった。
父親の一心を手伝う時もある夏梨は、ほとんどの怪我がどんなものか、わかったのだろう。

「……確かに、酷いの……」

夏梨の声に答えるように、夜一が繰り返す。
ところで、と一護が遠慮がちに手を挙げた。
「なんで寒さで皮膚が裂けるんだ？そんなこと、聞いたこともねぇ。」
「……人によるのだそうですが、原因は主に寒さによる血行不良だと言われています。」

「アカギレみたいなもんか！！」
「……まぁ、規模がまったく違いますけど、ね。」
ポン、と膝を打った一護に、浦原は「う〜ん・・・」と唸りながらも頷(うなず)いた。

「……その現場に居合わせ、酷い裂傷を負いながらも、早めに意識を回復させた者が言っておった。
『異様なほどの寒さで皮膚が捲(めく)れ、また、大きく裂けて大量の血が噴き出す――――――――
その様はまるで、《摩訶鉢特摩地獄(まかはどまじごく)》を思わせた』・・・と。」

「ま、まか・・・？」（一護）
「まか・・・摩訶不思議？マカロン？」（織姫）
「……土間・・？」（夏梨）
「……聴いたことはないが・・・地獄と関係あるのか？」（チャド）

夜一が何を思ってか、一人の死神の証言を口にしたが、一護・織姫・夏梨・チャドは聴いたことがないらしく、それぞれそう言った。
「……地獄の一つで・・・」
浦原が答えようとした時、静かに声を発し始めたのは、じっと黙っていた石田だった。
「『八大寒地獄(はちだいかんじごく)』と言う、想像も絶するほど寒いとされる地獄の集

まりの中で、最下層に位置する地獄の名前だと、言われている。」
「その通りッス、石田サン。
更に言えば、『摩訶(まか)』は『大きい』という意味だそうです。」
石田の話を肯定し、そのうえ名前の由来を付け加え始めた浦原に、今度は織姫が手を挙げる。
「それじゃあ、その後の『ハマドマ』は、どんな意味なんですか？」
「『ハマドマ』でなくて『鉢特摩(はどま)』ッスよ、井上サン。」
明るい声でそう訂正を入れると、浦原は更に話し出した。
「『鉢特摩(はどま)』は、その『摩訶鉢特摩地獄(まかはどま)』のすぐ上に位置する、つまり『八大寒地獄』７つ目の地獄の名前です。
それは、梵語で『紅い蓮華』という意味の言葉に漢字を当てたものです。
そのために、『鉢特摩地獄(はどまじごく)』のことを『紅蓮地獄(ぐれんじごく)』とも言います。」
「『摩訶鉢特摩地獄(まかはどまじごく)』の意味は、『大き』な『紅蓮地獄』。
故にこうとも呼ばれておる――――――――――」
「「『大紅蓮地獄』……と。」」
一護・織姫・チャドは目を大きく見開き、驚愕の表情を浮かべた。

「……大、紅蓮・・・。」

浦原と夜一の重なった声に、一護が返すかの如(ごと)くその言葉を呟く。

夏梨は、その言葉が何を指すのかわからなかったようだが、どうしても聞けるような雰囲気ではなかったため、口を開こうとはしなかった。

また、時間だけが進み始める。

この時点でほとんどの者が、犯人の目星を付けていた。

否(いな)、一人しか考えられなかった。

瀞霊廷を氷漬けにし、機能を止めてしまうほどの――――――『大紅蓮』と言う名の力を持つ者を。

《信じられない――――――『あいつ』（『彼』）が、そんなことをするなんて・・・。》

硝子(ガラス)と障子がはめ込まれている窓の外を、誰かが雪を踏みしめて歩く音と、子どもの嬉しそうな笑い声が横切っていった。

8・化け猫の報告　見つけた影（後書き）

長かったです……。
見てみれば、約４５００字でした。

……ちゃんと、詰め込み過ぎとかはない、はず、ですよ・・？

え～…、お気づきの方が多いと思いますが、児丹坊の「じ」の字が違いますね。

凹凸の『凹』の字にひとあし（兄の下の２本の線）なんですが、どうやら我が家のパソコン自体に入っていないらしく、『文字パレット』なるモノで探してみても見つけることができませんでした……。なので、一番感じが似ている、“児童”の『児』の字で書きました。

誤字ではありません。

『地獄の話』は本当です。
コンビニで『地獄について』みたいな本を見つけて買ってしまい、いつかお話に絡ませたいと思っていました。
ちょっと満足です。

次回、２件目の事件の現場でもう一人のチビと出会う……ところまで書けたら良いなぁ・・

9・近付くな（前書き）

命令調なタイトルですが、お気になさらずお読み下さい。

と、とりあえず…「忘れた頃にやってくる」の『忘れた頃』より前に更新できた……。
よかったぁ…。

今回も例によって、ヘンな言い回し、誤字脱字がございましたら連絡下さい。

では、どうぞ。

9・近付くな

空気が重い。

その一言に尽きるほど、その場所は静まりかえっていた。

理由はひとつ。

有り得ないと思いたいことが、ついさっきわかってしまったからだ。

皆が皆、否定しようとしてももう決まっているかのように覆(くつがえ)すことができないでいる。

そんな空気の中、まるで意を決したかのような声が上がる。

「浦原さん。あたし、公園でこれ、拾ったんだ。」

夏梨のものだった。

そんな声と共に、夏梨はスッと卓袱台の上に右手を差し出す。

浦原が「ハイ？」という声と一緒にその右手の下に手を出すと、その手に何か、冷たいものが落とされた。

夏梨の右手が退かされて、落とされたものがなんなのか確認できた。

ほんの小さな、一欠片(ひとかけら)の氷。

ずっとこの部屋にあったはずのそれは、まったく濡れていないために溶けていないとわかる。

顔を上げ、浦原は夏梨に尋ねた。

「これは？」
「だから、公園で拾った。あの“例の公園”の噴水の場所で。」

なにか、手掛かりにならない？

まっすぐな眼差しで、夏梨は浦原を見つめている。
浦原はその小さな氷を見つめて、唸るように告げた。

「この氷から発せられる霊圧と、町中に感じられる微弱な霊圧とを照合してみましょう。
あと、この霊圧は誰の物なのかも、とりあえず……
お手柄ッス、黒さ…いえ、夏梨さん。」
その言葉に少し嬉しそうな顔をした夏梨に、一護は「いつの間に拾ってたんだ…？」と尋ねていた。
浦原は立ち上がり襖に手をかけて、ふと何かを思いだしたかのように呟く。

「皆さん。今日のところは、お帰り下さい。
そして、私から連絡のないうちは、この店に近付いてもいけません。」

浦原はそう言うなり、一護たち全員を店の外へ追いやり、シャッターさえピシャリと閉めてしまった。
その様はまるで、すべての来客を拒んでいるかのようにも見えた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ちぇっ。何だよ浦原さん、あんな険しい顔して……。」
「しょうがないよ一兄。きっと何かあるんだよ、あのゲタ帽子にも、さ。」
ぼそりと呟いた一護に、夏梨が手を頭の後ろで組みながら言うと、織姫が言った。

「でも、なんで浦原さん、『お店に近付いちゃダメ』って言ったのかな…？」

みんな答えがわからずに、黙ってしまう。

すぐに言葉を発したのはチャドだった。
「わからないが、黒崎の妹が言ったように、浦原さんにも何か考えがあるんだろう。
もしそうなら、俺たちはその言葉に従った方が良いんじゃないか？」
「……そう、だね・・・。」
織姫が小さな声に、皆が浦原の顔を思い出した。

冷たい、まるで近づいた者を殺そうかというような目。
しかしその目は、相手を思いやっている時の浦原の目でもある。
これからもなにかが、起こるのかもしれない。
そしてその“なにか”に、浦原はもう気付いている。

みんな、そんなことは知っている。

パコッ

なにか気が抜けるような音がした。

その音がした方へ目をやれば、石田がケータイを取り出していた。

「何かあったら、浦原さんとは無理でも僕たちの間では連絡を取り合おう。

黒崎、お前のケータイを出せ。」

石田の言葉に、「なんでだよ？」と一護は首を傾げる。

すると、石田はケータイを持っている手とは逆の手で眼鏡を押し上げた。

「決まっているだろう？

ケータイの電話番号を知らないのは君のだけだ。

死神のケータイの番号なんて、本当は知りたくもないんだからね。」

『だったら連絡網とかでも良いんじゃねぇか？』と思いながらも、一護はズボンの尻ポケットからケータイを取りだす。

ちょっとした復讐として、電話番号のみならず、メールアドレスも一緒に送ってやった。

すると、石田は画面を見た一瞬　顔を顰めたが、諦めたのか呆れたのか　ひとつ溜息をついてから、何事もなかったかのようにケータイを上着の内ポケットに仕舞い込んだ。

一護たちはそのまま別れの挨拶をし、各々の家路についた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夏梨は一護の横を歩きながら、空を見上げた。

寒い夏がやってきてから、太陽は一度も顔を出していない。
雪が降るか、曇っているかのどちらかだ。
夜には、とても綺麗な月が見えるというのに。

ちゃんと晴れ間は、太陽は戻ってくるのだろうか。

そう思った夏梨の心の中は、まるで曇っているかのようにモヤモヤしている。

ふと横の兄の顔を見上げれば、眉間の皺がいつもより多く、深く刻まれていた。

兄が、こんな顔をする……
それだけで、夏梨の不安はいっそう深くなった。

言い様もない不安を抱えて、2人の兄妹は家に急いだ。

その次の朝、一護たちにとって衝撃的なことを知ることになるとは、この時誰も想像さえしなかった。

9・近付くな（後書き）

浦原さんって、なんかこう、カッコイイ時はカッコイイですよねｖ
その格好良さが出せていると良いんですが……どうでしょう？

……なんかダメだぁ…腕落ちた気がする……

夏梨ｓｉｄｅの番外編の前に割り込ませようかしないか考えましたが、とりあえず割り込ませておきます。
もとの話ですからね（↑だったら先にこっち書けって。）

久し振りに、次回予告。

次回、“ジャージを着た小さな影”と遭遇です！！

……きっと。たぶん。

つめたいひとかけら（前書き）

ちょこちょこと書いていたら書けていた文章です。

視点を変えてあるので、ある意味本筋ではありません。

番外編ってことで、まぁちょっとはお楽しみください。

つめたいひとかけら

夏梨はただ、黙っていた。

いきなり浦原と夜一さんに『ほにゃらか地獄』と言われても、彼女にはよくわからない。

最後の方になってやっと聴き取れた『ぐれん地獄』と『大ぐれん地獄』だって、何がどう『犯人』への確信となったのか。

「・・・・（聞きたい。もの凄く聞きたい・・）。」

夏梨はそう思っていても、どうしても聞けなかった。

聞けるような雰囲気ではないのだ。

皆が皆（自分の兄でさえ）、思い詰めたかのような顔をして、押し黙っているのだ。

その顔は、確信を得てもどうしても「そうでない」と思いたいような、そんな顔だった。

この中では一番力の弱い、さほど事情の知らない自分が、そんなことを聞けるわけがない。

そしてそんな自分を、兄たちはなるべく関わらせようとはしないだろう。

確かに自分は、この中では何もできないかもしれない。否（いや）、“あるひとつを除いて”きっとできない。

夏梨は、お茶の入った湯呑みを睨んだ。

でも。

それでも。

『あいつ』は、自分の仲間(ダチ)だ。
フットサルの助っ人として、ほんの数回参加してもらっただけだが、
それだけで充分。

夏梨は目を瞑(つむ)り、そっと右手をズボンのポケットに当てる。

涼やかでひんやりとした、硬い感触がそこにある。
あの事件現場で、唯一自分の知っている気配を発していた、ほんの
一欠片(ひとかけら)の、“ソレ”。
これを出すのはある意味、兄たちに絶望を与えることなのかもしれ
ない。

しかし、このままでいて良いものではないはずだ。
手掛かりという手掛かりは、なるべくすべてをかき集めた方が良い
だろう。

すっとポケットの中に手を滑り込ませ、ソレを握り込む。

兄たちは、大丈夫。

それにこれから先、自分は何もしないんじゃない。
連れて返るのは兄たちに任せて、自分はずっと、信じて待っていれ
ばいい。

兄の、達成感に満ちた笑顔が見られるように。

そんな兄に引きずられ、迷惑そうな顔をした『あいつ』を迎えることができるように。
また『あいつ』とフットサルができるように。
眉間に皺を寄せて、どこか強がっているような顔を見せてくれるように。

ただ、信じてさえいればいい。

兄を、仲間を。

それが、自分にできる唯一のこと。

意を決したかのように目を開き、夏梨は右の腕を卓袱台の上に突き出した。

「浦原さん。あたし、公園でこれ、拾ったんだ。」

つめたいひとかけら（後書き）

たぶん夏梨は、これから自分がどうされるのかわかってると思うの。賢く、聡い子だと思うから。

夏梨にとってどれほど大事なものか、何となく書いてみたかったのです。

……同じテーマで、別の短編物としても書いてみたいです。

こんな短い物も読んでくださってありがとうございました。

１０・代行の逡巡（前書き）

……おそよう（？）ございます…。

やっと続きを投稿しましたが、すみません超短いです…。

激短です……

いえ、とりあえずお待たせするわけにはいかないか、な……と思ったもので…。

この続きはなるべくすぐに書き上げますので、それまでお待ち下さい！

すみません！！

え～…、ではいつものように、ヘンな言い回し、矛盾点、誤字脱字などございましたらお教えください。

では、どうぞ。

10・代行の逡巡

不安げに帰宅の道に着いた黒崎兄妹だったわけだが、その日の晩のうちにまたもや事件が起こったのだった。

銭湯での水道管破裂・負傷事件。

銭湯屋の息子が、夜遅くの掃除の時間にいきなり何者かに腹部を斬り付けられた事件である。

第一発見者は、その銭湯を営む男性で、負傷者の父親。

水道管破裂の原因は、『水が凍った際、体積が膨張したため』とされ、事件とは深く関わりのないことだと思われる。

ちなみに、その銭湯屋の息子の傷はかなり深く大量に出血もしたたものの、低すぎるほどのその現場の気温と、父親と医者による、発見してからの適切で迅速なる処置のため、命に別状はないとのことだ。

また、その現場には氷漬けになった懐中電灯が転がっていたらしい。

その事件のことを一護はまたもや翌朝のニュースで知ったわけだが、『氷漬け』というところで一護は眉を顰めた。

氷漬けにされた、瀞霊廷の建物。

氷漬けになっていた、公園の噴水の溜められた水。

そして今回、氷漬けにされた懐中電灯が発見された。

（やっぱり、アイツ・・・冬獅郎の仕業（しわざ）なのか・・・？　　でも、でもっ・・・）

日番谷(アイツ)がやるとは、一護はどうしても思えないのだ。

その後　黙々と朝食を食べ、食器を片づけると早々に2階へ上っていった兄を、夏梨はじっと見つめていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

部屋へ入り扉を閉めると、毛布が起きたままにめくれているベッドへダイブする。

ボフン、と跳(は)ねながらもベッドに落ち着いた己の体。

枕に顔を埋(うず)め、嫌な考えを払拭しようと何度か顔で枕を叩く。

もちろん、そんなことをしたって消えはしない。

『なにが』？

決まっている。

収まる様子を見せない体のうずき。

自分で確かめなければ。

テレビで見たとしても、それは自分の目がじかに見ているわけではない。

現場へ行こう。

まだまだ一日は始まったばかり。

時間はたくさんある。

「うっし！！」

そう気合いを入れて跳ね起きると同時に、一護はベッドヘッドに括り付けてある代行証をひっ掴み、自分の胸に押し付けた。

１０・代行の逡巡（後書き）

如何だったでしょうか……

……やっぱり短いですか？……いえ、最近やっぱりすごく忙しくて……

ほとんどが丸１日なんですよね、学校の授業が……

でも、ここでは愚痴るつもりませんし、これからもがんばります！！

これからも『粉雪の日』、ご拝読くださいませ！

１１・仮面の子ども　現る（前書き）

どうも今晩和。日曜だったのでほぼ丸１日執筆活動に励んでいた氷翠です。
そのくせあんまり進んでないです、すみません…

今回は少し短めですが、つらつらと長くなるとヘンテコになることがわかったので区切りが良いと思ったら投稿しようと思います。

え～、誤字脱字などございましたら連絡下さい。
なるべくすぐに訂正を入れます。

では、どうぞ。

１１・仮面の子ども　現る

死神化して窓から飛び出した一護は、家の前でサッカーをやりに行こうとしている夏梨を見つけた。
その夏梨にはひとまず「家から出るな」と言っておくと、一護は空中に足場を作り、それを踏み切ることで瞬歩を使う。

「……やっぱりね。」

夏梨が小さく呟いたことを
不満そうにため息をついたことを

一護は知らない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

瞬歩を使い続けて数分。
隣接している鏡野市に程なく近いその場所に、例の銭湯はあった。
向かいの家の屋根の上から、一護はその建物を見下ろす。

テレビで見たことは、本当だった。

その男湯への入り口には、テレビドラマで見たような黄色いテープが貼られていて中に入れないようになっている。
殺人事件ではないものの、あまりにも奇怪(きっかい)な事件故に、現場を保存しているのだろう。

先ほど近付いてみたが、どうやら時間制で女湯のみ使うことにしたらしい。
そんなことと時間が書かれた紙が、女湯の方の引き戸のほうには貼られていた。

例えどんな逆行に遭おうとも。
不利な状況になろうとも。
そのとき最善と思える策を練りに練って、考えに考え。
いつでも自分の部下を思うようなアイツ……

「……そんなアイツが、こんなことやるようには思えねぇ・・・。」

置き去りにされたような、やりきれないような。
はたまた、親友に裏切られたような、そんな心境で。
ぽそりと呟いた一護の言葉は、誰に聞かれるわけでもなく空に消えていく。

はずだった。

「ほんでも、やったんはアイツや。」

ザリ、という足音と共に後ろから聞こえてきたのは、関西の言葉。
しかも、このズバズバハキハキ言いきるような言葉を使うのは、一護が知っている中では、3人。
振り返ってみれば、見えたのは薄い黄色の髪をふたつに結わえた頭。

ピンクのジャージ。
背は、今思っていた者と同じぐらい。

「ひ、ひより・・？」
一護はその子どもを指差し、まるで信じられないモノを見るかのように小さく呟いたのだった。

「『さん』をつけろて言うたやろ。もう忘れよったんか？ハゲ。」
ピキリ、と額に青筋を趨らせながら言う女の子・猿柿ひよりに「俺はハゲてねぇ…」と小さく呟きながら近付いた一護。
まるで間延びしているかのような声で尋ねた。
「で？なんかあったのかよ。ひより。」

すると、目の前が少し暗くなり、そして――――――

すぱこーーーーん

小気味よくマヌケな音が、一護の額から聞こえた。
額を抑えながら小さく唸っている一護の目に、片方のサンダルを持って腕を組んでいるひよりの姿が映った。
それはもう、青筋などいくつも浮かんでいるおっかない顔で。

「いい加減にせぇよハゲ一護！！
『ひ・よ・り・さ・ん』や！！“さん”を付けろて言うてるやろ！！何遍言わす気ぃやアホンダラ！！」

「そっちこそ！！俺はハゲてねぇって何度も言ってんだろうが！！
それに、ハゲてんのは一角だ！！」
「誰やねんソレは？！あぁん！！」
ひよりの言い分に遂に我慢できなくなったのか、一護も怒りだした。
２人の言い合いはヒートアップしていく。

「それにやかましい声出すなや！！うちのツッコミにつっこんどったらあかんで？！
それに、何遍でも言うたるわ！！ハゲハゲハゲハゲハゲ一護！！
お前なんか牛乳かけて喰うたる！！」
「俺は苺じゃねぇ！！」
「あぁもうどーでも良いから黙りぃ！！
よう考えたらうちはこんなアホな話をしに来たんとちゃうんやった。
」

ハッと思い出したかのように言ったひよりに一護は「おめぇが先に言い始めたんだろが！！」と大きな声で言ったものの、日和はそれを無視した。
声の質を変え、静かに、そしてまるで脅すかのように言った。

「シンジがやられてしもうた。あんのおこちゃま隊長にな。」

静かに言ったはずのその言葉が、何故かよく通って聞こえた。

１１・仮面の子ども　現る（後書き）

はっふ～…

微妙な伏線も入れて……「こんなになりました」っと。

題名考えた時になんとなく「うちは子どもやない！！」というひよりちゃんの声が聞こえてきたような気もしましたが、まぁそれは放って置いて。

なんか、凄いことになってきた感があります…

作者自身でもですよ？！けどまぁ、それでも書いていきます。

こんなグダグダな作者ですが、どうかしばらくおつき合いください。

次回はですね、どんな経緯で平子がやられたかを書きます。

安心してください。一撃ではないですから。

では、ここまでの読了、ありがとうございました。

次回をお楽しみに。

１２・青年の斬られた仮面　１（前書き）

お久し振りでっす、氷翠です。

読んでもらっている皆さま、１ヶ月経っちゃいまして、本当に申し訳ないです…

いろいろ反省点はあるのですが、前書きなので自重します。

え～…そういうことで。

今回も誤字脱字、矛盾点などありましたらご連絡ください。

感想なんかも書いてくださると、飛び上がるほど嬉しいです。

……強制はしませんが。

では、どうぞ。

１２・青年の斬られた仮面　１

ため息のように小さい風が、ひよりの髪を揺らした。
たったそれだけなのに、ひよりが言ったその言葉がさらに重くのしかかって来るようで…

一護にとって　ひよりのその発言は、かなりの衝撃だったようだ。

「………え？ちょ、な・・・？」
「せやから、真子があんの銀髪のガキにやられた言うとんねん。よう聞ぃとけどアホ。」

言われたことが信じられなくて、うまく言葉が紡げない。
そんな一護に、ひよりは静かな声でさらに続けた。

「良ぇか？今から話すんはホントのことや。まったくもって嘘偽りのない話や。
よう聞いとき。」

ひよりのその静かで真剣な声に、一護は真っ直ぐ彼女を見つめる。
１人の証人、ひよりの言葉を聞き逃すまいと。

「昨日、晩飯を買いにここを通りかかった時には・・・」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

もうかなり暗かったんや。

うちはじゃんけんで負けてしもてな、しょうがなく真子と晩飯を買いに行って、その帰りのことやった。

最近はまったくもって寒いやろ？
せやからうち、いつも以上に冷えてしもうてなァ・・・いつも以上に言い合いしとったんや。

「あ～も～なんでこんな寒いんや？！
今８月やろ？夏真っ盛りのはずやろ？！
どうしてこんな寒いねん！！
真子、オマエ確かカイロ持っとったよな？ちとこっちに寄越し？」
「はぁ？なんでオレのカイロお前に渡さなあかんねん。
持って来ぇへんかった自分の所為やろが。我慢せぇや。」

相も変わらず口答えしよったんじゃアイツ・・（怒）

…って、そんなことはええんや。
ちょうどそん時にな。
この銭湯の前に差し掛かった時でなぁ、ちと感じたことのある霊圧を感じたんや。

真子と顔を見合わせて、すぐ物陰に隠れてな。
しばらく様子を見とった。

すると、いきなり窓をぶち破って出てきた影があってん。
それが見たことのある銀髪やったさかいに、真子の「ちょい待てや！」っちゅう言葉聞かんでうちはすぐ駈けだしてしもた。
斬魄刀担いどる銀髪の前に回り込んで、うちはその影に聞いたんや、

「何しよったんや?!」てな。
そしたら、なんて言って来よったと思う?
「……なんか、チビっちぇえのが出てきたなぁ。」
「誰がチビじゃ!オマエの方がチビやないか!!」
図らずとも再会した相手に、開口一番「チビ」はないやろ?!
って続けたらアイツ、更にこう言うたんや。
「あっそ。だからなに?
俺急いでるからさ、退(ど)いてくれない?」
「はぁ??!」って思たわ。(口にも出てしもたわ)
「だからなに?」やで?
いくらチビで隊長ごっこやとしても、一応隊長やっとるヤツの言葉やない。
さらに問いつめたろ思て1歩前に踏み出した時。
首根っこ掴まれて後ろ引かれるような、そんな衝撃を感じたんや。
なんやて思て後ろ向いたら、真子がうちの首根っこ掴んどってん。
うちはすぐに真子に怒鳴ったわ。
「何すんねやハゲ真子!!早うこの手放さんかいっ!!」
「うっさいわ黙っとれ。死にたいんか?落ち着けや。」
怒鳴っとるあいだに真子の顔が近付いて来よって、うちの頭のすぐ上で止まりよった。
けど、視線はずっと前を向いとる。

いつものちゃらけとる目ぇとちゃう、あたかも藍染のことを見とるような目やった。

うちは黙ってそんな真子の視線を追って、前におる銀髪を見た。

思わず小さい声を出してしもたわ。

よう見たら、銀髪のもっと流斬魄刀は血ぃ付いとったんやからな。

時間が経って赤黒(あかぐろ)う変色したもんやない。

たった今なにかを斬ったような、まだ滴(したた)っとる血ぃやった。

「……オマエ、そこんとこの銭湯でなに斬って来よったんや？」

うちが叫ぶより先に、真子がちっこい声で呟くように尋ねる。

真子の言葉に少し目を瞠り、あぁ、となにか納得のいったような顔をして

「これね…」と担いどった斬魄刀をうちらに向けたんや。

「……あそこは魚屋でも肉屋でもない。なのに、魚や肉を斬ったとでも思う？

……『ヒト』に決まってんじゃん。」

銀髪はころころと笑いながら言うた。

目ぇはまるっきし笑うてへんかってんけどな。

その目にうちは、さぁっと血の気が引いたんを感じとったんやけど、真子は

「そら、ぶっそーな話やな」とまるで茶化しとるように言うておった。

前髪で隠れておってよう見えへんかったけど、その額には一筋、汗が伝っとるのがわかった。

尋常やないて、真子もわかっとったようや。

「オレはそないなぶっそーなこと、さらさら好かへんねや。
このまんま帰らせてもらうで？」
表情だけ余裕を見せながらちみぃっとずつ後退(あとずさ)る真子。
勿論うちは真子に首根っこ掴まれとるまんまやさかい、同じように
銀髪から
遠離(とおざか)って行った。

「待ちなよ？」

透き通った氷みたいな声に、真子の足が止まった。

「誰が帰っていいって言ったのさ？
どうせみんな死んじゃうんだから、今ここで斬らない理由はないよ。
」

そう言うた時の銀髪の目は　これからも忘れることはあらへんと思うわ。

青みがかった銀色にぎらぎら光っとって……
でも、どこやら寂しそうな感じがしたんや。

銀髪がスッと斬魄(かたな)刀を持った手ぇを袈裟懸けに斬ろうて構えた。

それを見た真子が「逃げや！！」て叫んだその瞬間、景色が勝手に流れて身体がふわって浮いた。

ようわからんうちに足が地面に着くように体制整えたんやけども、
そのときはちょうど、

真子に背ぇを向けとったやさかいに、どういう事が起こったんかはその瞬間は見えへんかった。

「コラなに放り投げとんじゃ！女は物や……な…い……」

とりあえず、うちんこと放り投げよった真子に文句のひとつでも言うたろ！て

振り返った。

頭真っ白になった。

その先にあったんは、真子の向こう側で怪しゅう嗤(わろ)うてる銀髪と、血を飛び散らせとる真子の後ろ姿やった。

「し、真子ぃ！！

クソッ……」

家は悪態ついて瞬歩で真子に寄り、また戻る。

銀髪にトドメ刺させるわけにはいかへんからな。

けど、真子は

「あ、アホぉ…早う逃げ、言うたやないか……」

「そっ　そない言うたかて…お前…」

「気にすんなや…。こんな傷(もん)、まだまだ浅い方やで…？」

「どっ……」

どこがじゃ！！

肋骨見えてんねんで？！

これのどこが浅いねんっ！！

……って、言いたかってんなぁ・・・

浅い呼吸の合間に、それだけを言うてる真子を見て、
なぜか知らへんけど、言えへんかった・・・。

そない苦しそうやっちゅうに、なにうちんこと心配してんねや、て思うた。

うちがそない思てる間にも真子は斬魄刀引き抜いて、ひとつ静かに呟いた。
ケガを負っとるとは思えへんような、ホンマに静かな声やった。

ただ、今までやとありえへん言葉やった。

「倒れろ　『逆撫』」

抜刀したそのすぐ後に、いきなりの始解。
今までの真子やったらありえへん。

ただ事やない、なんて、うちはそんときにやっと認識した。

１２・青年の斬られた仮面　１（後書き）

ちょうど良いわけではありませんが、何となくこの辺で斬ります。
中途半端で申し訳ない…

最近筆が進まなくて、四苦八苦してます…
本当に書きたい話題になかなかのせられない、と言いますか…

それなのに！
オリキャラ有りのオリジナルに話を続けて、シリーズにしてしまおうかと、
今はあんまり関係ないことを思いついてたりしてたり…
それはまぁ置いといて。

今回書いてて思ったこと。
「大阪弁って難しい！！」この一言に着きます。
東北弁の方がまだ書き易い。

今回も読んで下さり、ありがとうございました。
次回でひよりちゃんの回想、終わらせたいと思います。
だって大阪弁難しいんですもん！！

１３・青年の斬られた仮面　２（前書き）

どうもです。氷翠です。

何というか…微妙にお話が逸れて来ちゃってますよ…

どうしようちゃんと戻るかなぁ…

……努力してみます……

と、言うことで。

また、誤字脱字等なにかありましたらご連絡ください。

感想もぜひどうぞ。

（強制は致しません。しかし、何を感じているのかを教えていただけるととても嬉しいです。）

では、どうぞ。

13・青年の斬られた仮面　2

認識したと同時に、うちは突っ込んだ。

「オイコラ真子！
お前いつの間に斬魄刀の匂い嗅がせよったんや？！
匂い嗅がせへんと解放できんとか言うとったやろ？！」
「アホゥ。」

心配でいっぱいやったうちに、いつもの調子の真子の声が届く。
（……あかん。いらんこと口滑してしもた…。）

「オレを誰やと思ってんねや？
鯉口斬っといて嗅がせたんや。オレはタダでは斬られへんぞ。」

……こういうとこは流石やなぁ、ってまぁ思わんこともない。
意外な自信満々な声で言うとるけども、ほんまは余裕なんぞないてことも、
うちは知っとる。

……せやから。
うちは不安でいっぱいや。

「アイツには藍染の時にいっぺん見せとるやろ？
ほんまに大丈夫なんか？」
「……
……なるようになるやろ。」
「なんやねん今の間は？」
「五月蝿いわ、下がっとき。」

あぁ、まったくそないなこと思うとらんようやな。
そう思いながらも、言う通りに下がってやった。

「おまえの斬魄刀だったっけ？その変な能力。」

「ホンマ大丈夫なんか？」て思っとった時にそう言い出したんは
充分離れとった銀髪。
なしてか知らんが俯(うつむ)いとって顔はわからん。

「相手の視界も何もかも、上下前後左右、全部逆に認識させる。」

それこそホンマに氷みたいな声や。
感情さえも籠もっとらん。
上の空ともちゃう、なぁんも含まれてへん、キレイに透けとる氷の声。

ただ、その声は末尾になるにつれてだんだんと小さくなりよる。
しまいにゃあブツブツ呟いとるとしか　わからへんほど。
なんとなく聞き取れたんは、「このちからのなかで…」やら、「うつろだった…」やら。
確か、「さしちまった…」とも言うとったかな…？

なにを刺してしもたんか、うちにとっちゃまったくわからん話や。

ホンマ、いったい何言うてんねん。

うちはそれが腹立ったっちゅうわけで…。
「いったいなんやねん？

ちっさい声で言うとらんで、もっとおっきい声で話してみぃや？！」
そう怒鳴った瞬間や。

「解(と)けぇぇぇぇっ！！」

超がいくつも付く、それこそ化け物(バケモン)のような、バカでかい霊圧を吹き上げながら
叫びよった。

空も一気に曇って、ぱらぱらとちっちゃい氷の粒が降ってきよった。

「早く解きやがれそのちからぁぁぁぁっ！！」

叫びながら、真子のいる方へえろう速く突っ込む。
逆撫の能力(ちから)、働いとるんやないんか？！

「し、真子ッ…」
「来んなやボケッ！早う逃げろや！！」

真子が叫んだて思たら、その時にはもう真子の右腕は凍っておった。

「早う行ってハッチ呼べ言うてんねん！」
「ハ、ハッチぃ？！なんでハッチ呼ばな…」
「……っ」

うちの声に、真子は答えへんかった。
否、答えられへんかったと思う。

うちも、たぶん真子も、時間が止まったように思たんや。

信じられへんもんを見て、うちの頭はまた真っ白になってまう。

真子の背中から、赤い何かが生えとった。

所々、その赤いもんの間から銀色が見えとる。

斬魄刀(かたな)やった。

真子の背中から生えとるように見えたんは、銀髪の斬魄刀やったんや。

真子の血ぃで真っ赤に染まっとる斬魄刀から、伝(つた)って流れ出よった血ぃが

滴り落ちることはあらへんかった。

伝い落ちる途中で、血(それ)は固まった。

否、凍ったて言うた方が正しいんやろな。

じっと見とったら、ズズズッとゆっくり斬魄刀(かたな)が真子の背中から抜かれていって。

腹から完全に抜かれたら、真子の身体は傾(かし)いで。

ドサリと、真子はうつ伏せに倒れよった。

信じられへんかった。

逆撫が効かへんかったっちゅうことも。

真子がやられたっちゅうことも。

それをやったんが、あのお子様隊長やっちゅうことも。

真子の血はまったく広がらへん。
真子の腹に張り付いとる氷が赤くなっとった。
出血はちびっとだけやし、酷くなる前に凍りついてしもたんやろな。

ほっと息ついて、うちは視線をあげる。

目に入った銀髪はと言うと、両腕をだらりと力のう下げよって、俯いとった。
肩が上下しとったさかい、息が荒くなっとるってすぐわかったわ。

気付けばあのバカでかい霊圧は、ナリを潜めとった。

真子が倒れて、逆撫の能力(ちから)が解けよったからやと思う。

ゆっくりと力のう顔を上げたときに見えた目ぇは、だいぶ落ち着きを取り戻しとったようや。
ただ、やっぱりどこか変梃な光が灯っとるような感じやったな…

うちはいつもやったら、真子斬られたっちゅうだけで斬りよった相手に斬りかかるのやけども、
この時はまったく身体が動かせへんかった。
斬ろうとも思わへんかった。
ただ、あんの変梃な光の目ぇを向けられとるだけやったのに。

逃げなあかん。
はよ逃げな、うちも斬られてまう。

はよ帰って、真子が斬られたてハッチに言わなあかん！
そないこと思ても、身体はまったく動いてくれへん。
殺られる
このまんまやったら、殺られる！！
うちん目の横を、跡を残しながら一筋、汗が流れ落ちた。
顎まで伝って、顎から離れた一滴の汗が、地面にポタリと落っこちたんとほとんど
同じ瞬間やった。
「興醒めした。」
「……は…？」
興醒め…？
ぼっ……
「バカにしとるんか？！あぁ？！」
んがぁ、と吠えてやると、銀髪はふぅ、とため息つきよったアノヤロ。
「尻尾巻いて吠えてるヤツを殺すほど、バカなことする気は今はないよ。」
「…っ」
確かに、うちが怒鳴ったんは苦し紛れや。
それを見破る、っちゅうかまぁ見てすぐわかったんやとは思うけど。

「俺の気まぐれに、感謝しなよ？」

銀髪はそう言うて　ふふん、て小さく鼻で笑いよったあと、瞬歩で消えよった。

……

……

……しかし

気まぐれに感謝、やとぉぉぉっ！！

んなモン誰がするかってんねや？！

覚えとれよ！こんのどチビがぁぁぁっ！！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……っちゅうことがあってん。」

「……へぇ…。」

未だに拳をしっかり握り、鼻息荒くそう閉めたひよりに、一護は微妙な気持ちで相槌を打った。

なんと言えば良いやら……。

子どもだなぁ……と言うか、結局怒ってるのか、と言うか……。

なんと言えば良いかわからないまま、一護は小さくため息をついた。

そんな一護に、ひよりは詰め寄る。

「なんや一護？

うちの言うこと信じられへんとでも言うんか？！」

「いや、別にそう言う訳じゃ…」

「そんなら、どういう訳なんや？！言うてみぃ！！？」

「言うほどじゃねぇ…って止めろひより首絞まってる死ぬ死ぬ！！」

いつの間に首に絡み付いたのか、ひよりの腕が首をギリギリと締め上げているのを、タップして止める。

「か、加減ってもんをしてくれ…頼むから……」

「覚えとったらな。」

（……またやるつもりか…！？このやろうっ！！）

ふん、と横を向いたひよりに、一護は静かに拳を振るわせた。

「で、平子の方は良いのかよ？」

そう言えば、とでも言うように、一護はふとひよりに尋ねると、

「いちお今はハッチに手当てさせて、休ませとる。

驚いたんは、刀傷を氷が塞いどったっちゅうところや。

治療ん時にその氷がえろう邪魔やってんで。ハッチが苦労しとったわ。」

「じゃあ、とりあえずは大丈夫なんだな。」
「当たり前やろ。」
一護は少し安心したように、そう呟いた。
ひよりはただ、そんな一護を見つめるだけである。

あーあ、と声をあげたひよりを見ると、彼女は頭の後ろで手を組み、呟いていた。
「いちお、あのゲタ野郎にこの話しよ思てたんやけど、店閉めよってるさかい、連絡がつかんのや。
一護、お前うちの代わりに話つけときぃや。」
「あ、それ俺にもムリだわ。」
「はぁ？！」

あっけらかんとした言葉が返ってきたため、ひよりは大きな声を出してしまった。
まさか、一護にさえも会おうとしていないのか？！

足元にあった小さな氷の欠片を、石ころのようにカツン、と蹴りながら一護は続けた。
「浦原さん、俺たちに『店に来るな』って言ってたんだよ。
なんでかはよくわからねぇんだけど。」

ふーん…、と呟いた少しあと、ひよりは顔をいきなり一護に向け、同時にまたサンダルでビンタを喰らわせた。
「アホぉ！！」
「はぁっ？！って痛ぇなおい！！」
「お前の顔なんぞどうでも良ぇ！！
あの銀髪チビ、次かどうかはわからへんけど絶対ゲタ野郎んことはターゲット付けとるで！！

ゲタ帽子はそのことわかっとってお前に『来るな』言うたんじゃ！！
少し考えただけでもわかるやろ？！」

叩(はた)かれた左の頬に手を当て、「……まじ？」と一護は呟いた。

「否(いや)、でも…浦原さんだしよ……」
「ゲタ野郎やからって“アイツ”はマズイんや！！
早うゲタ野郎に話しつけなあかん！！
他の奴らとも連絡つけや！！行くで一護！！」
「え？おっおう！！」

ひより特有の畳み掛けるような口調に押され、一護は焦りながらもケータイを取りだしたのだった。

１３・青年の斬られた仮面　２（後書き）

ひよりちゃんのあのキャラは何となく好きです。
傍にいたら飽きなさそう。でも友達とかだったら大変そう…

あ～あと少しで夏期休暇が終わってしまう……
課題どれも終わってないんだゼ……

次回はきっと、尸魂界から何かあります。

……そこまで書けるようにがんばります。

影での命令　裏での話（前書き）

ちょっとした伏線です。というか、伏線しかありません。

オリキャラ出ますが名前は出ません（出しません）。

…って、一種のネタバレだなこの前書きは…

この先、読まなければわからないような話ではないので、読みたくない人は

読まなくても大丈夫です。

一護がひよりと接触する、数週間前の話。

（つまり、現世で事が起こる前の話。）

影での命令　裏での話

どこかの一室。

まわりはほとんどが白い部屋。

そんなところに、2人がいた。

一方は背が高く、もう一方は低い。

「……来たか。」

男性の声。

「なんです？部隊舎からわざわざ呼び出して、統括長としての仕事の命(めい)だなんて…

珍しすぎて、槍どころか刀や鉄砲玉も降ってきそうで恐いのですが。」

女子の声。

「悪かったな、しょっちゅう変なことで呼び出して。」

「ホント、いい加減にしてくださいよ。」

「うるせー。」

「……で？」

「あん？」

「肝心の任務内容を聞いてないんですが？」

「あ～…そうだったっけか？」

「ちょっと…」

手を挙げ女子の声を止める。

「“あるヤツ”の監視だ。

ソイツの力が、この世界にも影響を及(およ)ぼし始めている。」

「はぁ…

でも、なぜ、私を？

ただの監視ならば、なにも私でなくても事足りるはずです。」

「確かに、ただの監視ならば他のヤツでも事足りる。

だがな……

ただの監視じゃねぇんだよ。

お前がソイツを見たら絶対にたまげるだろうからさ。それに……」

ふっへっへ、と悪戯っぽく笑う声、の後にーーーーー

声音を元に戻し、続ける。

「それに、例の『青』の持ち主かもしれねぇヤツだから、だ。」

「……そう言うことですか…」

「だから、『殺すな。殺させるな。』だ。良いな？」

「承知。」

女子の声がそう言うと、背の低い影が部屋を出ようと扉に向かう。

「…そうだ。」

扉に手を掛け、思いついたように背の高い影へ振り向く。

蒼い瞳が、背の高い影の瞳に向けられる。

「ソイツの…監視対象の名前は　なんて言うんです？」

その問いかけに、暗がりの中で　蒼い瞳を向けられた金色の瞳が、光った。

「……護廷十三隊十番隊隊長…日番谷冬獅郎、だとさ。」

「……ふーん…なかなかの名前だな。」

楽しそうなその瞳を見つめ、背の低い影は、今度はもう止まることも瞳を向けることもせずに部屋を出た。

1人、背の高い影が、白い部屋……その者の仕事場に残された。

影での命令　裏での話（後書き）

オリキャラの影をちらつかせる。その１ーーーーーな回でした。
氷翠です今晩和。

オリキャラ……
私としては何というか、待ちきれなくなってしまって…先走りました…
スミマセン！！
しかもまたやるかもしれません…。

次回は本編進めます！！

ではまた！！

１４・２人の死神　１（前書き）

どうも今晩和。
テスト期間中なのに投稿しに来ました。

……遅くなって申し訳ないです…

自分にしたら結構難しくて…なかなか筆が乗らなかったんです…すみません…

変な違和感、きっとあるかもですが、誤字脱字・妙な言い回し等ありましたら連絡下さい。

では、どうぞ。

14・2人の死神　1

浦原商店前にて、集合した現世組＋1。
ちなみに、夏梨は呼んでいない。
危ない事になるのは考えなくともわかるからだ。

店の前の道には相も変わらず雪が積もっていて、靴の中に入ってくるほどで石田は小さく舌打ちしていた。
雪掻きされているのは見てわかるのだ。
ただ、その上にさらに積もり、踝(くるぶし)の高さほどに達していたのである。

イライラしているようで、厳しく一護に問(と)い質(ただ)す。

「おい黒崎！なんだって僕を呼びだしたんだ？
君と違ってこっちはひとり暮らしなんだ。掃除に洗濯、やる事はたくさんある。
あんまり時間は無いんだ！程々にしておいてほしいんだけどな？！」
「悪いって。だってひよりのヤツが…」
「はぁ？？うちの所為にするんかい？！
なっとらんなぁお前！
人の所為にしたらあかんやろ！」
「ちょっとお前は黙ってろ！！」

ひよりの言葉にカッとなってそう叫ぶ。
するといつもの如く、

ーーーーーー否(いや)、いつもとは少し違って、今度はひよりの跳び蹴りが一護の額にヒットした。

「う〝ぉうっ」
「女性に対して　そないな言い方するモンやないで！！ちぃとは勉強しぃや！！」

「……うわぁ…」
「……さすがに痛いだろう…」
織姫とチャドの驚いた声と…
「理不尽だ……」
一護の呟きが重なった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ほら、早う呼びぃ。」
ひよりが顎でシャッターの方をしゃくると、一護は「しょうがねぇ…」と呟きながら一歩前へ進み出た。

そして、ガンガンガンとシャッターを叩いて叫ぶ。

「浦原さ～ん。いるんだろ～！話があるんだ、開けてくれ～！浦原さ～んっ！！！」

大声を張り上げ、何度も叩いて（今やもう殴っている）、ずっと呼び続けるも……

「……出て来ないね…」
「……取りつく島もないみたいだ。」

織姫や石田の言葉通り、出てくる気配さえない。

叩くのをやめ、一護がひとつため息をついた。
そのため息で、なんとも居心地の悪い雰囲気が辺りを満たす。
平子の負傷、その経緯……
そして、浦原が標的になっていると考えられると言うこと。
話したい事はたくさんあるのだ。
ただ……相手がそれに応じない。
頭をガシガシと掻きながら、一護が口を開く。
「出てこないんじゃ　話になんねぇよ…」
「しゃーない…明日出直すとしよか？
早う話してしもて楽になったろ思ってんけど……」
「否（いや）。出直すにしろ、今は彼女達の話を聞くとしようじゃないか。」
頭を掻いていた一護も、その一護に言葉を返し、歩き出そうとしていたひよりも、石田のその言葉に「は？」と振り返って彼を見た。
まるで雲を見上げているかのように、視線を空にやっている石田。
それに倣（なら）い、同じように空を見上げてみれば……。
黒い影が2つ、確かにそこにあった。
否、少しずつ近付いてきているのを見ると、どうやら落ちてきているようだ。

「オイなんとかしろよ！！お前鬼道得意だろーがっ！！」
「何を言っている！私とてそれほどの力はないわ！！
だいたい！！お前がちゃんと穿界門を開かなかった所為だろう！バカ者ッ！！」
「オメェが途中で話しかけるからだろうが！！俺の所為じゃねぇっ！！」

……何やら喧嘩をしているかのような声音が微(かす)かに聞こえてくるが……
まぁ気にするまい。

その影はどんどん近くなり、そして目の前で　ボスン、と言う音を立てて、雪の上に足を着けた。

高いところで赤い髪が自慢気に揺れ、その隣では黒髪の間から菫色の瞳が光っていた。

「よう、一護。」
「……遅くなって、すまぬ。」

ニヤリと口角を上げて男が言い、凛とした声で女が言った。

六番隊副隊長　阿散井恋次

十三番隊隊士　朽木ルキア

護廷隊の隊士である2人が現世に駆り出されたということで。
それはつまり、遅れながらも　尸魂界の調査の手が現世にまで届いたという証でもあった。

現世組のほとんどは驚きで目を丸くしていた。
と言っても、そうとわかるのは織姫と一護、ひよりのみで、石田は最初から気付いていたので驚きもせず、チャドは動じているのかさえわからない。
「朽木さん…！」
「ルキアに…恋次…？！
何でおまえらがここに？！」
一護が指差しながらそう尋ねる。
指差された事に少し嫌悪している様子を見せるのは恋次だ。
まるで幽霊でも見たかのような反応ではないか。
……まぁ、似たようなものではあるのだが。

「いきなりやってきたのだ。驚くのも無理はないか…。」
「俺たちゃあ、日番谷隊長を捜すために来たんだよ。」

苦笑するように言ったルキアに、その後を続けたのは恋次だった。

「尸魂界のことはあとで話すとして…いったい、なにをやっておるのだ？」

ひょい、と一護の横からその先を見ようとするルキアに、唯一落ち着いている石田が今までのことも加えて、掻い摘んで説明した。
仮面の軍勢たちのことはあの決戦後、簡単にではあったが説明されていたために、ルキアと恋次は驚きを隠せない。
2人とも目を見開いて、
「……平子真子…殿が……日番谷隊長に……？」
「そいつって確か、元五番隊隊長とか言ってなかったか…？

それを一発で」
「一発やない！！二発や！！」
ひよりのツッコミに恋次が「あ～…ソウダナスマン」と棒読みではあるものの返事をする。
それを切欠にぎゃいのぎゃいのと騒ぎ始めたひよりと恋次を、ルキアはどうやら無視することに決めたようだ。
「ところで。」と呆れた顔をしながら一護に尋ねる。

「実際のところ、こちらの被害はどのような感じなのだ？」

一瞬、沈黙が辺りを満たした。
一護や織姫、石田とチャドはお互いの顔を見合わせる。
先程まで取っ組み合いまでしていた恋次とひよりでさえ、「え？」とでも言いたそうな顔をしてルキアを見ていた。
別に、深い意味はないのだが……
そうせずにはいられなかったようだ。
「あ…あのね、朽木さん…」
織姫がそっと　そして気まずそうに、ルキアに耳打ちで答えた。
「……見ての通り…と、話した通り…なんだけど……」
「……あ。
そっ、そうだったな！…すまぬ…。」

自分がなんと恥ずかしいことを聞いたのか、ルキアもわかったようだ。

べ、別に深く考えてではないのだ！

何というか、その……口が滑った、と言うか、うっかりと言うか……

真っ赤な顔をして、まるで弁明するかのように言葉を連ねた。

そう。

現世の被害など、周りを見て、そして先ほどの石田の話を聞いてわかるはずなのだ。

辺り一帯の道路は雪に埋もれて見えなくなっているどころか、太腿（ふともも）辺りとかなり高く積もっていたし（今は雪掻きされてさほどでもない）。

傷害事件が、世に知られていないものを加えて3件、こちらでは立て続けに起きている。

そして、ある1人が狙われているかもしれない、と言うことも。

※※※※※※※※※※※※

何故か今度は落ち込んでいるルキアを　恋次と織姫がやんわりと宥め、ひよりは「変なやっちゃな～…」と呆けながら、しかし感心するかのように呟いた。

一護は早く話を進めたくて、うずうずして…

結局は彼自身も、恋次たちと一緒にルキアを宥めることにした。

１４・２人の死神　１（後書き）

前書きにも書きましたが、すみませんテスト期間中＆微妙なスランプ？で投稿が以前よりも遅くなります。
すみません…

その後も、１ヶ月に２度ぐらい投稿できれば良い方かな～…なんて思ってます。

こんな私が書いている作品ですが、お付き合いくださるととても嬉しいです。

では、これで。

１５・２人の死神　２（前書き）

短めですすみません……

いつものことですが、誤字脱字等がありましたらご連絡ください。

では、どうぞ。

15・2人の死神　2

「さて。どうするべきか……」
なんとかルキアを元に戻すと（と言っては語弊があるが…）、一護は改めて頭を抱える。

みんながそれに倣って頭を抱えたのだが、石田だけはそうではなかった。

「……君たち。
尸魂界の方はどうなっているのか、話してはくれないのかい？」

そう。
石田はそれが気になっていたのだ。

日番谷は元々尸魂界の死神。
こちらに来る前に絶対、尸魂界（あちら）でなにかしら事を起こしているはず。

そしてそれは、再び尸魂界（あちら）へ行ってしまった夜一の報告によって
簡単ではあるが明らかにされているのである。

それは、誰にだってわかる。

しかし、彼はどうやら詳しくそのことを知りたいようでもあった。

そんな、痺れを切らしたかのような石田の言葉に　ルキアは「まぁ待て。」と止める。
「これは、総隊長からの伝言でもあるのだ。『浦原喜助に話せ』と

言われている。」
「別に誰に聞かれても良いが、浦原さんがいないところでは話すなってことになってんだよ。」
めんどくさそうに頭を掻く恋次。
みんなが肩を落としたその時だった。
ルキアがつかつかと浦原商店のシャッターに近付き、ひとつ息を吐いて……
大きな声で、ひとこと。
「今出てこなくば、今後一切この店には寄らぬぞ！！」
その一言はとても大きな声で。
シャッターがビリビリと小さく震えるほどだったと、後に一護は言う……

「……しょーがないなぁ…」
シャッターの内側から、ぽつりと聞こえた。
「……お？」
聞こえた言葉にそう言ったのは、誰だったのか。
と思った瞬間には、シャッターが音を立てて一護の腰の辺りまで開いていた。
「少しだけッスよ？
ただでさえ皆さん、ここにいると危ないんスから。」

そう言ってシャッターの下から顔を出したのは、目的の人物　店主の浦原喜助だった。

扇子で隠した口元と　帽子の下から光る瞳が嫌に真剣過ぎて、その場にいる者はみんな、嫌でも緊張し始めた。

１５・２人の死神　２（後書き）

いやぁ……相も変わらず変な方向に行きそうで恐いです……

今回は思いっきり前振りですが、尸魂界で何があったのかは、実は次回では詳しく言うつもりはありません…。

否だって、誰よりも詳しいのは乱菊さんだし……

いつもこんなんですみませんが…こんな作品でも付き合ってくださると嬉しいです。

では次回！！

１６・来るなと言われたその店で（前書き）

や～…っっと続きを投稿します。どうも今日和、氷翠です。

もう、「どれ程振りですか？」って自分で聞きたいほどです…すみませんでした…

難産でした、ハイ…

えぇ～…、こんなですが、いつもの如く誤字脱字、矛盾点、変な言い回し等ございましたらご連絡ください。

では、どうぞ。

16・来るなと言われたその店で

「どうもすみませんねぇ、なぁんのお構いもできなくて。」
時期、否(いや)気温違いに扇子をパタパタ扇ぎながら　チャラけたように話すのは、言わずもがなその店の店主・浦原である。

その浦原は　各々座ったり立ってたりしているその面々を、目深に被った帽子の下から見つめた。
みんな顔が引きつっていたり恐かったり　眉間に皺を寄せていたりしているが、共通して言えるのは、どの顔も真剣であることと、軽んじていないと言うこと。

浦原はそれを確かめると、他には見えないように僅かに口角を上げ、安心したかのように小さく息を吐いた。

さてさて。

以前より2、3人ほど増えての集まりとなった今回ではあるのだが……。
やはりと言うべきか、浦原はいつもの調子で声を出す。
「『来るな』と言っておいたのに　それでもわざわざここに来たと言うことは、それなりのことが起こったと思って、良いんスよね？

ーーーーーーーー黒崎サン？」
「え？あ、おう。」
まさか自分にそう言ってくるとは思っていなかった一護は、少し言

い淀みながらも頷いた。
寄り掛かっていた箪笥から少し背を浮かせて話し始める。

「平子が」「誰かにやられたんですよね」
言葉を遮られた一護は、何で知ってんだよ…と少し悔しそうに小さく呟く。
「当たり前じゃないッスか。
平子サンの霊圧が急に弱まったんですから。
……ナルホド。だからひよりサンが一緒にいるんスね。」
一護の声を聞き逃さずにその訳を言い、そしてうんうん、と頷く浦原。

質問しておきながら自分で答えを言い、さらにいろいろ自分だけで考え自己完結しているかのような彼を見て、一護は何とも言えない居所の悪さのようなものを感じた。
眉間に皺を寄せ、顔を顰めている。

「……浦原。こちらの話を始めるぞ？」
それを見かねてか、ルキアがひとつため息をついてそう言うと、「あ、ハイハイ。すみません。」とあまり悪びれていないかのような口調で答えたあと、「それよりも先に、ひよりサンの方からお話聞いても言いッスか？」と付け足した。

「む。まぁ確かに、そちらの話を始めるぞ？」
「はぁ？！オイなんでだよルキア！！」
「バカ者ッ！
確かに伝言を伝えることも重要ではあるが、こちらの状況を浦原が聞く方が大切であろう！！」
「状況なら聞いたじゃねぇかよ…」
「それは『私たちは』、だろう！！」

こちらに来る前に何かあったのだろうか？
ちょっと聞いてきた恋次にはこのように怒鳴り返しているだから、ルキアはいつにも増して不機嫌のようであった。
そんな彼女をまぁまぁ、と諫めるのはもちろん、織姫である。

「……オイ恋次。ルキアなんかあったのかよ…」
「俺だって知りてぇよ、そんなこと…」

裏ではそんなことをコソコソと話している男２人組（一護と恋次）。

そんな彼らはおいといて。
それなりに仲が良い織姫に止められ、まるで心持ちを変えようとするかのようにひとつ、ふぅ〜…と息を吐くルキア。

静かにスッと目を開くと、これもまた静かに　呟くように言葉を発した。
「ひよ里殿。そちらのお話から、どうぞ話してください。」
「…………しゃあないな。話したる。
よう聴けや。」

落ち着き払ったルキアにつられてか、ひとつ息をついたひよりも静かに話し始める。
いつもとは違う真剣な顔を浮かべ、浦原はその話をじっと聞いていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「……これで終いや。」

一護に話した時と同じような流れで浦原に聞かせていたひよりは、そう言って閉めた。

相槌も感嘆の声もなくただただじっと聞いていた浦原は、今も全く声を出さずに　何やら考えている。

「……どうしよったんや…？」

一切声を出さないのを見て、ひよりは静かに問いかけると浦原はやっと声を発する。

それはもう、小さな声で、ぼそりと。

そしてその小さな声は、静か過ぎると言っても過言ではなかったその空間でよくよく響いた。

「……死んでないんです、よねぇ…

……“まだ”。」

ほとんどの者がその本当の意味を解していなかった。

一護があまり深く考えずにため息をつきながら呟くと、それを合図とするように言い合いが始まった。

「まぁ、平子が死んでたらひより、すごい取り乱しそうだけどな……。」

「はぁ？！なんでウチが取り乱すて思うてんねん！！

そないな事あるはず……
……否、あるかもしれんけど……」
「ほらやっぱそうだろ？あんなに仲良さそうだし。」
「仲良うないわ！！」

「あのような様子を見せられては、誰だって仲が良いと思うのでは……。」
「オマエ黙れや！！チビ死神！！」
「チ、チビ…っ？！」

「お前の方がチビだろうが。」
「喧(やかま)しいわ！！赤犬野郎っ！！」
「俺は犬じゃねぇっ！！」

一護の言葉に食いかかるように　ひよりが怒鳴る。
横からルキアが申し訳なさそうに口を出し。
恋次はやはりひよりと馬が合わないらしく、彼女と熾烈な言い争いを始めようとしていた。

「…あぁっ！」

その時、素っ頓狂な声がルキアの横から飛び出してきた。

意味深な浦原の言葉を、あっという間に騒がしくなったその部屋で、織姫はいまだに考えていたのだ。

そして、あることに気付いたのである。

「今まで“まったく”、亡くなったって言う人が……出てきてない。」

戸惑っているような、そしてどこか「喜びたい」と思っているかのような声で紡がれた織姫のその言葉に、またその部屋は静寂に包まれた。

１６・来るなと言われたその店で（後書き）

乱菊さんが来るともうほんのちょっと少しぐらいスピード上がると思います…。

でも、これからも超どん亀投稿かと思います…

すみませんです…

こんな作者の書く作品ですが、これからもお付き合いくださいませ。

では。

……今思ったんですが…このお話、明るい場面がないですね……

うわぁ…

１７・思える可能性（前書き）

どうも今晩和。久しぶりでビクビクしている氷翠です…

なんだか最近、どうしても行動が遅いのをどうにかしたいんですが……どうにかならないものでしょうかねぇ……

あ、いえ、なんでもないです。申し訳ないッス。

そんなことより。

１ヶ月ぶりの投稿です。お待たせしていましたら申し訳ありませんでした。

そのくせグッダグダな文章になってしまった上にあまりお話が進んでいません…いや本当に申し訳ありません……

またいつもの如く、ヘンな言い回し、誤字脱字などありましたら連絡下さい。

では、どうぞ。

17・思える可能性

「今まで“まったく”、亡くなったって言う人が……出てきてない。」

静かに、そしてどこか嬉しそうな声で紡がれた織姫の言葉に、浦原は「そうなんです。」と頷いた。

「それぞれかなりのケガを負わされているというのに、死んでしまった人は誰一人いませんでした。
尸魂界でも、夜一サンの話を聞いたかぎりでは死傷者はいないとのことですし。
ケガを負わせるだけで充分なのか、ただそこまで考えが至っていないのかはわかりませんでした。

ただ、ひよ里サンの話の中、あるところでその理由がわかったんです。」
「“あるところ”？」
ひたすら話す浦原に、珍しくもチャドが声をあげる。

「『平子サンの刀傷を氷が塞いでいた。』…ってところッス。」

「……で？そこがなんやっちゅうねん？」
一層真剣な声で、浦原が答えた。それに、ひよりは腕組みをしながら答える。
自分の言ったことの中で、何が切欠となったのか。
それが気になったのだろう。

扇子を閉じて、浦原は続けた。
「ですから、氷が傷を覆っていたことで止血されていたと言うことですよ。」
「……だからなんだって言うんです？」
ひよりの疑問に答えた浦原へ、石田が追い打ちをかける。
彼にしては珍しく、わけがわからない、と顔には書いてあった。
「石田サンもわからないんスか？！珍しいッスねぇ。
止血をするということは、命を取るつもりはないと言うことッスよ。」
「ただ、斬魄刀（かたな）の力なだけじゃねぇのか？」
「傷口を氷漬けにして止血する能力（ちから）なんて、意味無いじゃないですか。
それとも、見たことあるんスか？
彼が虚に、そうしているところを。」
「……
……ねぇ、な……」
淡々と考えていることを話している浦原へ　一護が抗議するように尋ねれば、もっともらしい答えが返ってきた。
その答えに一護が悔しそうに呟くと、今度は恋次が口を挟む。
「それじゃあ、つまり……」
「その氷がなかったら平子さん、大量出血して死んでいたかもしれません。
つまり、まだ　人を殺さないほどの意識はあったということです。
なんせ、正義感の強い方ッスからね。意味もなく殺すということは出来ないんでしょう。」
「では、望みは……」
「あるってことッス。」
一護たちは、ルキアの言う『望み』がなんなのかはわからない。
でも、その言葉はとても嬉しいものに感じられた。

自然と口角が上がっているのを感じるが、それを抑えようとは思えなかった。
ルキアも恋次も、明らかにほっとしている顔をしていた。

「……それでは。」
帽子に手をやり、浦原が声をあげた。

その場にいる全員が彼に顔を向ける。
それを確認した浦原は、ため息をつくように、呟くように言葉を紡ぐ。

「本題に入りましょう。」、と。

続けられた言葉に、一護たちの感情が一変する。

「護廷隊、否（いや）　中央四十六室はなんて言ってるんスか？」

一気に地に突き落とされたような感覚だった。

そうだった。

『彼』は護廷隊の隊長の一人。
そんな『彼』が幾十もの隊士を斬り、そのうえ現世（こちら）で人間をも傷付けているのだ。
黙っている護廷隊ではあるまい。

ルキアの顔をじっと伺い見ている浦原に対し、ルキアは少しやりにくいように顔を歪めて言葉を返した。

「……なんとも言い様がない、としか言えぬ。」

ルキアの声が、重く部屋に響く。

「だが、私は一介の隊士に過ぎん。
『浦原に手を貸してもらい、日番谷隊長を捜し出せ。』ということ以上は、総隊長の伝言は詳しくはわからぬ。
その辺りは、まぁバカと言えどとりあえず副隊長を務めている恋次が伝えてくれるだろう。

頼めるか、恋次。」
「伝えるのは良いが……『バカ』と『とりあえず』は余計だっての…。」
頭を掻きながらそう恋次が言うと、何故かルキアの声がぶつけられた。
「良いからさっさと話さぬか！バカ者っ！！」
「ぁあん？！」
「まぁ待てって2人とも！！」

いきなり喧嘩をし出しそうになる二人を一護がどうにか間に割って入って、さらに恋次に話をするように促す。

だいたい、ルキアがあんな真顔で言うから、恋次も癇癪（かんしゃく）を起こすの

だ。
というか、2人はこんなにも仲が悪かったか？
……否（いや）　まぁ、微笑ましいって言やぁ微笑ましいのだが。

……今横から「戯（たわ）け」と小さな声で言われたのは　なんでそうなのかは知らないが、見逃してやる。
否、聞き逃してやる。
だからそんなふうに睨むな！話に集中させてくれ！！

やっとの事で始まった恋次の話に耳を傾けながらも、一護の眉間にはさらに一本、皺が増えたのだった。

そうさせた張本人であるルキアは、それには全く気づかなかったのか、あるいは気付いていてもそう言った仕草を見せないだけか、話している恋次を見つめていた。

１７・思える可能性（後書き）

前回言ってた意味はこういう事だったんですよ、なお話でした。

次回は、とりあえず尸魂界がどう考えているのか、書けていると嬉しいです。

では、今回もお付き合い下さり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0392p/

夏の粉雪の舞

2012年1月10日18時55分発行